# 婦人運動

第7巻 第1號



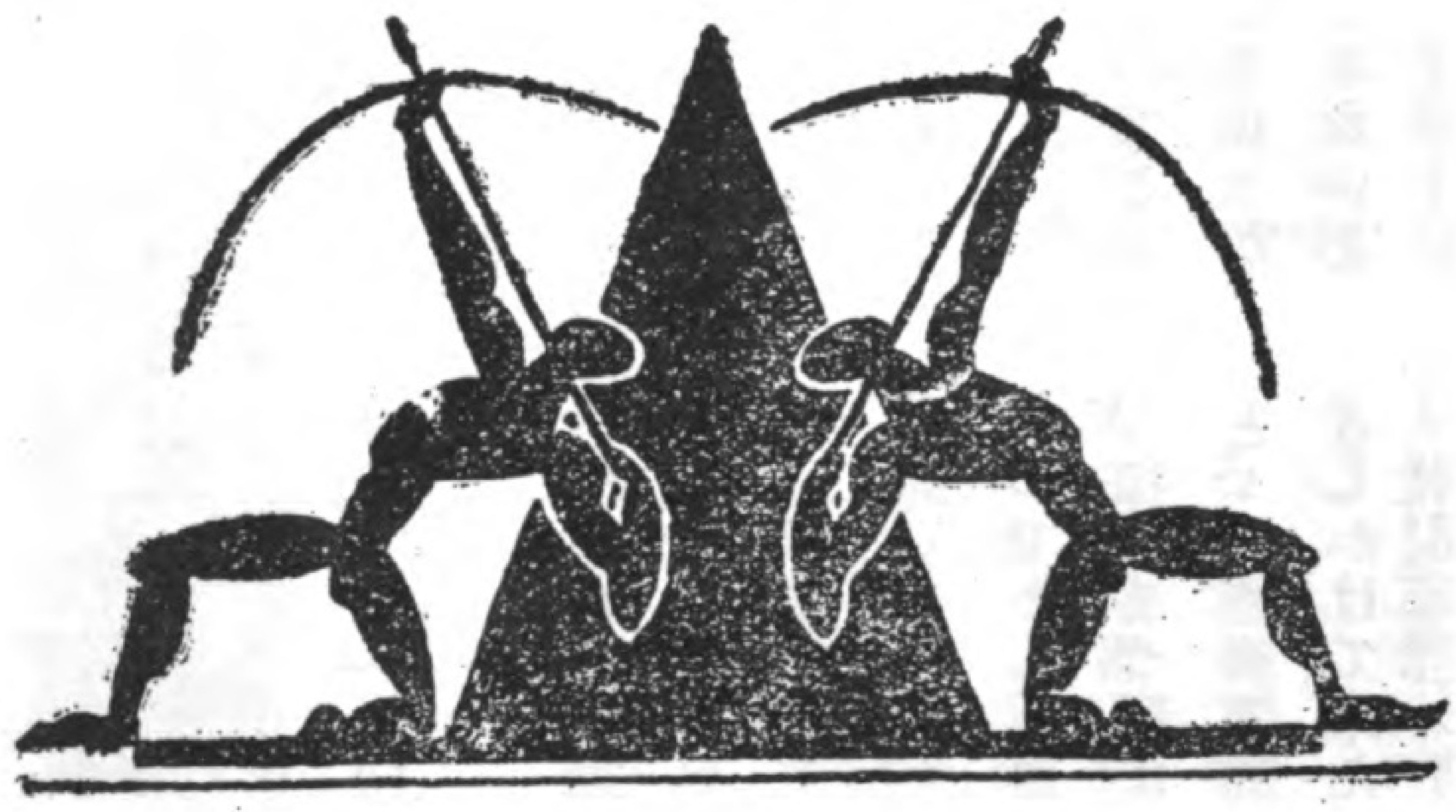
一月号

職業婦人社發行

# 婦人運動 一月號 第七巻第一號 目次

# 婦人運動

第七卷 第一號





# 昭和四年を迎へるにあたりて

## ―既往一年の婦人界を顧みる―

村山文子

新しい年を迎へるといふ事は、新しい元氣を感ずるものである。

わが婦人界が、まことに多事だつた昭和三年を送つてこゝに新しい第四年を迎へるにあたり、過去一年の足跡を振りかへりつゝ明日はどう動いてゆくだらうか？展望してみたいと思ふ。回顧は、新しい進路を踏み出す第一歩として有意義なことだと思ふからである。勿論その人の立場々々に依つて自ら觀方にも考へ方にも大變な相異があるものだから、こゝにに書くものが強ちに婦人界全般にわたる、そして正鵠を得たものであると自分で斷定するわけのものではない。

扨、まづ頭に浮ぶのは、婦人の政治運動の華々しかつたことゝ、經濟運動も、やうやう根を張つて堅實に伸びてゆかうとしかけて來たこと、この二つである。

暗雲低迷の第五十五議會はつひに解散、つゞいて普選最初の總選擧！　婦人界は、この劃時代的な出來ごとに異常に緊張して、婦人は未だ政治上には發言權をもつてゐないにも拘

らず普選に依る總選擧がどの樣な結果を齎すか——出來ることならば婦人參政權を獲得するのに成べく有利なやうに政治の分野を動かしてゆきたい、と、有産無産をとはず素晴しい活躍をなした。その結果は、大きな反響を社會の各方面に起して、いよ／＼婦人參政權の時代も近い、と考へさせるまでに至つた。それには、あの、婦選獲得共同委員の會收穫をみのがすことが出來ないだろう。

政黨政派に中立してたゞ婦人の參政權を獲得するために闘つてゐる團體と、各無産政黨に所屬して階級的な立場から、參政權をえやうとする團體と二つながら總選擧のときには、婦人參政權のために隨分奮闘したのであつたが、いよ／＼議會が初まつてからは、これらの團體の聯合委員會となつて協力して當局にあたることになつたのである。然し、第五十五の臨時議會は中間派の所謂灰色黨のために政友民政兩黨ともに見事にあやつられて、まことに飽氣なくすぎてしまひ、從つてこの婦選の共同委員會も、充分の力を振ふことが出來なかつたのであるが、新しい年を迎へ、ます／＼婦人界の氣勢をあげるために働くことゝ考へられる。(全然階級的なそれぞれの立場を明示してゐない婦選共同委員會が、協力に依つて充實するに從つて、立場々々に依る根本的な見解の相異が、だん／＼はつきりして來て自然解體をとげるやうなことがないかとみる人も大分多いらしいやうに思ふ。暫く成行をみやう。)

それから、無産政黨が充實するに從つて各組合に所屬してゐる勞働婦人の間にも政治的自覺が大分及んで行つたと思ふその他、二業地三業地の許可反對運動、戰爭反對の雄叫び、東京(及びその他の市町村にもあつた)市會革新の唱導など婦人の聲が各方面に高められて行つた。殊にわれ／＼の嬉しく思つたことは、それらが從來の專門的な政治運動家の間から次第に一般婦人大衆の聲に擴がりつゝあるといふことである。

×

不景氣！　生活難！　幼い子供の口の端に上るまでに普遍化されたこの言葉が、私たちの頭痛の種となり、消費經濟運動はこゝに必然の要求によつて生れて來たのであつた。勤儉奬勵のお題目ももはや馬の耳に念佛。あきらめてか、ブルジヨア婦人團體のお太鼓の音も鳴をひそめた頃、婦人消費組合協會、關東消費組合聯盟、家庭會らの活動が目立つて來た。

同時に各新聞紙の婦人欄家庭欄が、競うて婦人と經濟問題——即ち臺所むき一般消費生活むきの記事を常に多く扱ふやうになつたために、ます〳〵この方面に婦人の注意を集めることに成功したとも云へるかもしれない、新しい年を迎へてからは、この方面の婦人の運動も、きつと、もつと日常の問題の中から雄々しく進められてゆくであろう。出來ることならば、進んで、物價問題、稅制問題などにも、ぜひ婦人大衆を動員したいものである。

それから、職業婦人の團體の生れ出たものが三つあつた。職業婦人協會、相互職業婦人協會、職業婦人共濟會である。數に於ても、分野に於ても甚しく擴大され、激增する今日の職業婦人のために、今後これらの團體が働いてゆかねばならない仕事は隨分多いことに考へられる。社會は、もつと、職業に就いて働いてゐる婦人たちのために考へるべきである。同時に考へられることは、職業婦人自身の間にみなぎる人間的自覺、社會的自覺の力强さである。この力强い傾向が、これからの職業婦人の生活の上にどんなにか大きな變化を持ち來たすにちがいない。また、ぜひさうあつてほしいし、ぜひさうあるべきであらう。

なほ憶ひ出を辿れば、汎太平洋婦人會議に代表を選出するについてはからずも婦人界に激浪が打ち上げられたことである同會議は結局、日本婦人の代表とは名目だけで、少數のブルヂョア、小ブルジョア婦人團體の間に互選されて出かけてしまつたが、歸つて以來、代表者諸氏の間にも反省があつたと聞いてゐる。國際的な接觸をわが婦人界がもつたといふ點で、とにかくに目を四海に移させたといふ效果を——勿論、一部名流婦人だけのことであつたが——數へておかう。

×

戀愛について、婦人界が沸き返つたことも今年の目ざましい出來ごとであつた。丁度コロンタイ女史の赤い戀愛論がその頃邦譯紹介されたために一層、戀愛問題で火花を散らせたやうである。家庭の組織、家族制度についても、近來新しい樣式にてこの問題を見なほさうとする人が多くなつて來たやうに思ふ。新しい酒は、新しい皮袋にといふ言葉がある。これからさきわれ〳〵が住むべき家庭、形作るべき家庭が、どの樣な樣式で行はれるであろうか、又、行はれなければならないであろうか、これも明日にのこされた課題である。

# 婦人解放に於ける職業婦人の役割

下中彌三郎

## 一、職業生活は婦人覺醒のあらはれてある

近年に於ける職業婦人激増の勢ひは實に凄まじいものである。婦人が職業につく原因には、經濟的理由も可なり大きいだらうと思ふが、又、家の中だけの生活に滿足できないで、職業を求める樣になつた者も案外多いことと考へられる。而も家庭を出て、若い婦人たちが職業生活に入つても、たちまちその新しい生活に順應してしまつて非常に元氣にいそ〳〵と立ち働いてゐるのをみると、婦人の生活の激しい變りやうに、殊に若い婦人の、時代に順應する力の鋭いことにびつくりさせられるやうな場合が屢々あるのである。

斯うして婦人がます〳〵職業生活に入つてゆくにつれて、婦人の職業分野も擴大され複雜になつて行く。と、ます〳〵その生活は開けてゆくばかりであらう。全く現在のいろ〳〵な現象をみるだけでも、婦人の生活は今後どこまで開けてゆくだらうか、ちよつと見當がつかない位でないか。

この傾向は、見る人に依つては悲しむべき現象であるとなす人もある樣であるが――例へば貞淑といふ婦人としては最高のものを失ふだらうとか、生意氣になるだらうとか、人擦れ世間ずれがするだらうとか、わが儘者になつて母性をいとふやうになつてゆくだらうとか、いふ理由にて――然し、婦人が次第〳〵にかうして社會の表面にも出て働くやうになるといふことは、婦人覺醒の現れであつて、たとへ婦人自身にも未だそれをはつきりと意識しない者があるとしても、これは確かに婦人解放の力強い實證だといはねばならぬ。そして婦人解放といふ、われ〳〵の長い間の夢であつたことが――

多くの先覺者たちはその日が一日も早く來るやうにと外部からこれを常に望みつゝ機會のある每に刺戟を與へて來たのであるが、斯うして職業生活に飛込んで現實に經濟的活動に從事しつゝある、婦人としては最先端の生活に座をしめてゐる人たちの中から爆發的にその傾向――卽ち婦人解放の力强い傾向があらはれて來ることを信じられる。

## 二、多難なる生活の中に見出す力

東京などでは職業婦人の生活も極めて自然にわれ〳〵の目に慣れて發達して來たが、箱根や熱海ゆきその他の田舍の電車自動車の中などで女車掌が如何にも生々と働いてゐるのを見ると、見るからに賴もしく感ぜられる。そして考へられるのは、この傾向は必らずや二三年の內には工場に働く女工たちの上に響いて來るであらうと思ふのである。近頃女中の拂底は實に甚い。女中になるよりは、といふので女工になつた者が隨分多かつた樣であるが、やがて、幾分でも高い敎育をうけた者又は、氣の利いた者は、女車掌、女店員、事務員などを希望して少しでも仕事が自由で、興味もある仕事を選ぶやうになつてゆくのではあるまいか。そして、次第に、男子と對象の地步をぐん〳〵占めてゆくであらう。

斯うして進んでゆく結果、從來の女の型とは大分に變つた女が全國的に益々殖えてゆき、夫婦關係も、餘程異つた形で現れて來ることであらうし、引いては家庭問題、夫婦關係などからいろ〳〵に紛糾することがます〳〵盛んになつて來ること〻考へられる。

これは舊式な男子たちにとつて確かに一つの脅威であり、保守派の良妻賢母たちにとつて驚くべきことであらうが、さう考へる人たちは社會進化の傾向を見損つてゐるのであり、ほんとうの女の幸福とか進步とかを思はない人たちだと云はねばならぬ。

## 三、婦人が社會的に見出した生きる喜び

女が職業に就いて澤山の男子と肩を双べて働く樣になつて來ると男子をみる目が肥えて來てだん〳〵結婚の相手を見出すことが困難になつて來、勢ひ婚期を後れさせてしまふといふことを聞く。それもある程度の事實であらう。然し、それを以て、だから現在の男子は女よりもずつと思想的におくれてゐる。時代の傾向に、男子の方が取り殘されてゐると斷定

することは早計でないか。男子としては全ての男子――と云つてい丶程の者――が職業をもつて働いてゐる。然し、婦人の職業生活をしてゐる者は未だ何と云つても少數で經濟的事情が餘程原因をなしてゐるとは云へ、自覺程度の高い先覺婦人であるのであるから、さういふ婦人としては、先端にある人たちとざらにあるそこいらの職業男子とを比較對照して男子の方が劣つてゐるとするのは不合理である。男子の中の先端に立つ人たち――例へば社會運動に沒頭してゐる人たちとさういふ婦人とを比較したらどうであらうか。

それはとにかくとして、男子の婦人に求める處も時代と共に非常な變化を遂げつ丶あるが、婦人にしても、一旦家庭の外に出て社會生活に觸れて來ると、所謂カゴの鳥になつて家の中だけに閉ぢこもつてゐるのがつまらなく、何か仕事をもつて自分の生活を樹てたいと思ふ樣になるのは極めて自然である。女教員などの中にかういふ人が極めて多いらしく、別段その日の生活に差支へぬ人でも結婚後もつゞけて職業生活をもつてゐるのが多いのである。

かういふ人たちは、一つの生活の喜びを持つた人たちで、それに依つて社會生活の興味を見出し、自分の生活をますます豐富に充實させてゐるのである。

とにかく、われ〳〵が日常に見、聞き、又感じてゐるいろんな社會事象の變化の中で最も著しい變化は婦人の生活の中に現れて來さうである。そして、婦人の生活の變化は、必ずや婦人としては最先端の生活にある職業婦人からまづ起つて來るであらう。

云ふでもなく職業婦人自身の立場から云へば、新しく職業生活に入つた生活といふものは、隨分多難なものであらう。殊に、家庭問題、性問題、自分のうけて來た教養と社會の實際とのへだたりなどから、失望することもあらう。え堪えずして沒落してしまふものもあらうけれど、その多難の中から自分自身で、婦人が魂を磨きあげてゆくといふことが肝要である。そして意識的に、自分自身の力で自分の進路を見出し開拓してゆくと云ふ力强い生き方をぜひ進めてほしいと思ふ。

婦人たちがさうして進んでゐる内には、男子の社會の中で從來行はれてゐる政治鬪爭や經濟鬪爭、又、社會的な教育觀などについてもよく理解しうる樣になつて來るであらう。そして、いろ〳〵な社會事象についての婦人としての批評もそ處から生れて來る。そしてやがては男子と共に社會生活に入つて少しも劣るところのない婦人となるであらう。



（田家の朝）

婦人界

# 政治季節を迎へて

奥むめお

いよ〳〵第五十六議會は初つた。

今度の議會がわれ〳〵女に興味深いことは、婦人公民權の議案――今の法律は、女を日本の公民として扱つてゐない。これを改正して女を公民にしやうとする案――が、政府案として提出されることに決つたといふ耳よりな報導である。

女を、政治上に半人前にしか扱つてゐない今の法律が正しいか、正しくないかに就いては、もう議論の餘地がないほど一般の輿論は、婦人の解放に有力に味方してゐる。この際、たとえ政府黨である政友會が一種の人氣取り策としてこの案を提出する樣になつたのであるとしてもこの案をわがものにして女がうまく利用するか又うまうまと政治屋どもに利用されてしまふかは婦人の覺悟一つにあると思ふ。

女はこの際、一大デモンストレーションを起して、直ちに、女を公民として認めよ、女にも參政權を與へよ！といふわれ〳〵の日頃の要求を、社會に――殊に頑冥なる政治家の前につきつけて闘ひ進むべきであろう。云ふまでもないことであるが、この努力は、また、一般婦人大衆への政治的啓蒙運動として、家庭の奥深く、又、職業勞働生活の鐵鎖にしばられて、過勞と無智と屈辱のかげ深く閉ぢこめられてゐる大多數の婦人の生活のその中にひそむ政治的要求に火を點ける運動でもなくてはならぬ。

さき頃のアメリカ大統領選擧戰のとき、各候補者は、婦人側の投票を集めるために主力をこゝに注いで闘つたといふ。フーヴアー氏が當選したのも、實に婦人側の人氣が集つたからだ、と傳へられてゐる。そして婦人たちの熱狂は大したもので、選擧戰を通じて女も、男と共に隨



（邦文タイピスト協會大會）

分活躍したと云ふのである。

やがて、わが日本にもさういふ日が遠からず來ることであろうと思はれる。

確乎とした己れを持たぬくせに、新物喰ひのわが國民性では、アメリカ婦人のやうに經濟的に惠まれてゐず、家庭的な煩累も一層多く脊負うてゐるに拘らず、きつと澤山の女が、新しく持つ參政權の嬉しく、珍しく、さぞ大騷ぎを演ずることでもあろう乎、と考へられるのであるが、それについてもしみ／＼考へさせられることは、女が政治的に目覺めるといふことは決してわれも／＼と皆の婦人が政治運動に狂奔することでないといふことである。家を離れ、子供を離れ、職業を擲て、でなくてはやつてゆけぬやうなところに決してほんとうの政治運動はない。其處にあるものは、スポーツだ。賭博だ。取引きだ。私は女の政治運動とは、平々凡々な女の日常生活の中に政治を見出し、その道を光りあり、幸ある明るいものにするために努力する一つの事務にすぎないと思ふ。選擧も、議會も一年毎に大げさに、お祭り氣分になりゆきつゝあるやうに見るのであるが、思ふに、政治とはもつと日常の茶飯事として、平々凡々の事務の内にとり行はれるべきではないか。

政治を、支配と、權勢慾と、お祭り騷ぎと、賭博の阿修羅の巷から救ふものは實に、普選に依つて新しく有權者となつた一千萬の無產者と今や公民權を獲得しやうとしてゐる——未だ參政權からは大分に遠ざけられて生活してゐる婦人である。この二つのもの協力抗爭に依るほか道はあるまい。

政治をして誤りなからしめ、民衆のためにほんとうによく福利增進の道を切開いてゆくためにわれ／＼は、つねに女としてのわれ／＼の日常生活——家婦たり、母たり、又、職業婦人たるわれ／＼の平凡な今日の生活をもつと／＼掘り下げ組織化することに依つて、その中から、常に政治を左右する鍵を握つてゐなければなら



（來朝のトーマ氏）

ぬのだと思ふ。

## トーマ氏の獅子吼

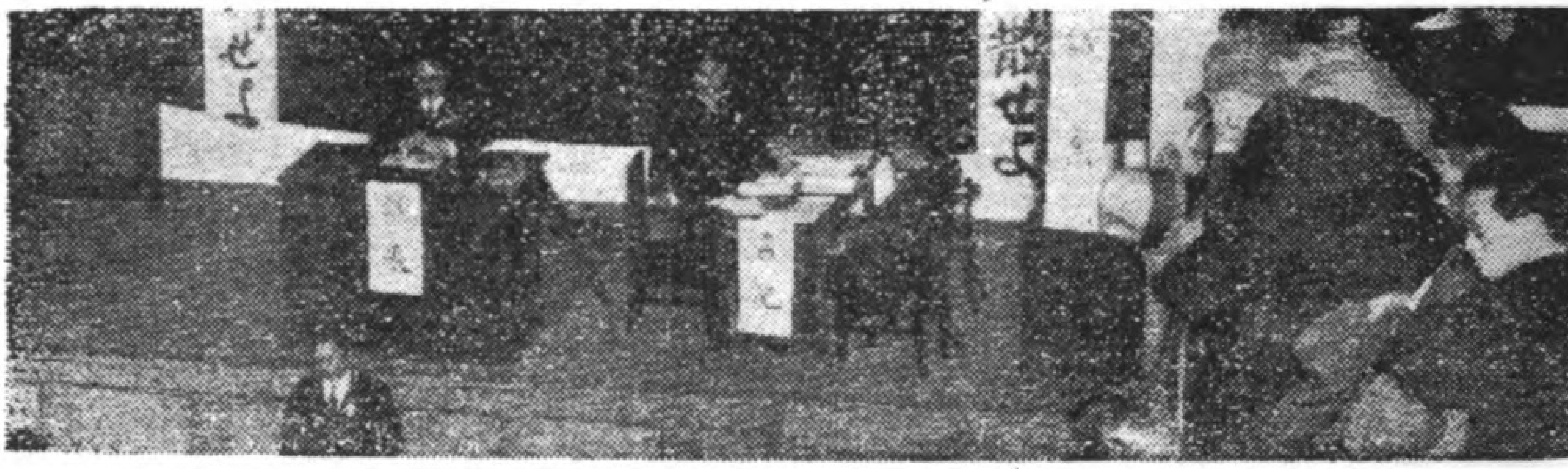
國際勞働局々長アルベール・トーマ氏は來朝して、各所で永續的の國際平和と國際聯盟の樹立について熱辯を振つた。氏は國際勞働會議で締結された條件が二十五ある內、日本はまだ九件しか批准してゐない。（印度でさへ十一件批准した）殊に第一回の會議のとき日本代表の鎌田榮吉氏は婦人勞働者の夜業禁止について「日本も近き將來に必ずこれを禁止する」と聲明したにも拘らず十年後の改訂期にある今日もなほ、印度と共に特殊國扱ひをうけてゐることは非常に殘念でないか、といふ意味の痛烈な意見も述べた。

## 職業婦人の大團結

今日、我日本で工場鑛山に働く婦人勞働者がざつと百萬、職業婦人百萬と稱せられてゐる。女と云へば、家庭の雜用におひまわされてゐるべき者だといふ先入主見が未だ中々深い我日本に於てさえすでにかういふ事實をわれ／＼は見なければならないのである。而も、それらの職業婦人勞働婦人たちの勤務年限は年々に長くなつてゆき晩婚、結婚難の事實さへ漸く著しくならうとしてゐると云ふ。

さき頃婦人邦文タイピスト協會の大會が早稻田大學の大講堂で催されたときに、會衆千數百人、金紗、お召、耳かくしのきらびやかな裝ひに混つて、一方には地味な、然し健實さうな職業婦人が一日の慰安をこゝに求めて集つてゐるらしいのを澤山に見て一口に職業婦人と云つても樣々であることに胸が痛くなるのを覺えた。

今日、薄給で、賴り少ない職業婦人のために未だ一つの團體もないばかりか、世間は、安くこき使ふことばかりを知つてゐて慰めること、敎へること、に就いて一臂の力を致さうともしてゐない。



（社會民衆黨大會）

職業婦人社の新企事業である「職業婦人の家」が、かういふ際に幾分の勵ましと力と慰めとを職業婦人諸氏の上に持ち來すことが出來る様に運用されるならば、ほんとうに幸である。

## 現實的な婦人問題をとりあげた社會民衆婦人同盟

去る十二月十日から三日間にわたつて行はれた社會民衆黨全國大會に於て、同黨に所屬する社會民衆婦人同盟は、

一、社會民衆黨黨員は、社會民衆婦人同盟に積極的に協力し、一日も早く婦人の强力な陣營が成る様に導くこと。

といふ婦人のために重要なる議案を出して承認させた。その實行法としては、黨の支部又は分會のある所には必ず婦人同盟の支部や分會を作ること、黨員の妻は、必ず婦人同盟に加入することといふのである。

從來婦人は、家事と育兒におひ使はれる結果家の中にばかり閉ぢこもつてゐるので非常に社會性にとぼしい。それに、夫や父親としての男子が、女は無智でたゞ〳〵自分の意のまゝになる方が便利だといふ風な淺はかな考へから、この傾向を助長するやうな場合も多いので、今日でも女を——殊に無産階級の女を一つの陣營に組織して共同戰線を張らうとする事は甚だ困難である。婦人から、進んで男子の理解と協力を求めることの種の提案は、理論的にはあまりに當然すぎる要求であるが、現實の問題として今の婦人はまだ〳〵今の男子にこの種の要求を突きつける必要があろう。

無産政黨勞働組合の如き最も進步的な婦人の團體に於てさへ往々にして婦人を自主的に働かせず、男子の必要から男子の定めたプログラムに從つて男子の手足になつて右にも左にも行くやうな無自覺な婦人を反つて重寶がる嫌ひがないと云へない。これらは決して婦人を婦人としてほんとうに生かしにゆく途でない。



## 森瀬美子氏

(無產婦人聯盟)

今日は、無產大衆黨本部のビラ張りだから手傳ひに來てくれる樣に、とSさんから勤先きの方に電話があつたので、ひけると早速出かけました。お粗末ではあるが、賑やかな夕食がすむと、總勢七人が三班に分れて、それ〳〵受持ちの地域にビラと糊を持つて出かけることになつて居ます。捕まつた時の用心にオーバーは着ない方がいゝ、等と用意周到なMさんが注意をして居ます、私の組は第三班で、Mさん、Hさん、と私の三人で地理の詳しいMさんを先導にして出かけました。

足袋なんかいらない、なんて强いことを言つて居たのですが、外に出てみると足が冷たくて感じがなくなりさうです、しかし强いことを云つた手前愚痴も言へず、糊鍋を下げて、SさんHさんの後について、成る可く人の目に付きさうな處を見付けながらはつて歩きます、三十分も經つと大部歩いたので、足の方は温くなつてきたのですが、今度は鍋を下げた手の方が冷たくて感じがなくなりました、SさんとHさんは元氣に組合歌を唱ひながら、ビラ張りに餘念がありません。

百枚近くのビラを張り終へ、受持區域を一周して引上げたのは もう十時近くでした。體の芯まで冷え切つて居るので、火鉢に手をかざした位では、とても駄目です。風邪の氣味はあるのだが、思ひ切つて錢湯に行きました。歸つて來るとまだ仕事が待つて居ます。支部の發會式と演說會が、四五日内にあるので、その準備に忙殺されて居るのです。

私は明日の勤めがあるので、いゝ加減で仕事を切上げて、皆樣にお先き失禮して歸りましたが、何しろ宿までは隨分遠いので床に就いたのは午前一時頃でした。

明日はまた、朝の九時から職業婦人としての私の生活があります、時節柄、忘年會、そして酒と女の生活にのみ、最大の興味を持つてゐる樣な人々と、席を竝べて事務をとらなければ食へない私なのです。そして職業婦人として、無產者として、婦人運動と、勞働運動の必要をいよ〳〵痛切に感ぜしめられてゐるのです。

それにしても、私たちのまわりの職業婦人の人たちは着物や、白粉や、活動の話ばかりに浮身になつて、僅かに三十圓や四十圓の俸給の前に、えい〳〵としてゐるのがなさけなくてならぬ。

幾百萬の失業者が巷に溢れてゐる現在では、「貧乏暇なし」の諺も通用しないかも知れませんが、幸ひにも失職の浮目から免れてゐる現在の私の生活、それは「貧乏暇なし」の一言で云ひ盡されてゐる次第でございます。

ひるは職業――それから無產政黨婦人部の運動へ、夜を晝についでの忙しさでくる〳〵舞ひの有様。でも、闘ひの中に私はほんとうに生き甲斐のある生活を見出してゐます。



## 金子しげり氏

（婦選獲得同盟）

身邊雜記をと求められて、今更のやうに見廻すわが身邊は索漠として然も聊かの憂鬱を混へる。

豚のやうに貪慾に仕事を抱えこんで、二十日鼠の申し子のやうに、一日くる／＼と働いてゐる私、今日の日も明日も明後日も、仕事、仕事仕事、金、金、金、それが婦選獲得同盟のおかみさんのあけ暮れなのである。

この帳場に坐り込んではや丸二年、その間に私の覺えた事は、仕事とは、地味な事務を克明にこつ／＼と積み上げる事なりといふ事と、仕事をするにはまづ金から拵へてかゝれといふ事。

かくて今年も貧弱な玄關の山茶花が咲いて散つて、婦選の事務所に冬が來たが、去年その花を見て「あゝあ、私も愈三十になるのかなあ。」と思つた私は、今年も同じ背景の前で「あゝあ私の三十も暮れるのかなあ……」と思ふだけなのである。

勿論これは自分で掘つた穴なのである。元來が世話女房型に出來上つた自分は、友達との共棲でも女房役にまはりたがり、更に婦選も緣の下の力持役を買つて出て、つまり二軒分の貧乏世帶のやりくりに身を沈めた迄なので、從つて顧みて大した悔もなければ、又將來にすばらしい飛躍の展開のといふ事も、性にあはない事らしい、玆の所、素朴平凡な心境が私を支配してゐる事に間違ひはない。

全く人の一生の間に、さう／＼いろ／＼の事に手を出したり、取り代へたり出來るものではない、どうやら三十迄でその人の一生の仕事が決るものらしいとしたら、私も峠が見えたといふものかも知れない。

たゞ自分は勉强はしたいと思つてゐる。然しこれとても思ふだけで、數年前の病氣が少し念が入りすぎてゐたゞけに、昔日のやうな無鐵砲が出來なくなつた私はこの頃、正確に八時間の睡眠をとらなくては、次の日の能率に關係する體になつたので、雜務に逐はれる晝と、休息の夜の間に、如何にしたら勉强の時間が作り出せるのか、甚だ以て意氣地のない自分に、每日愛想をつかし乍ら喘いてゐる譯である。

それに自分は此頃つく／＼物言へば脣寒しの心持に在るので、まあ默つて勉强もし、默つて仕事もする事だと、しみ／＼想つてゐるが、事實は思ふ半も遂せないみじめさだ。然し私は自分は疲れてゐるとは少しも思はない。焦つてもゐはしない。寧ろあのどこかに春のいのちをはらんだ冬樹のやうな心持を私はいまの自分の中に見出してゐる。

それにしても婦選も公民權だけは政府案として次の議會に出るとなると、案外先が見え出して來ないにも限らないと、私達の仕事は益々繁忙を加へて來る。理論鬪爭もこれに正比例して喧囂を增す事だらう。

無產黨の合同問題も、愈々實現の可能性が見えてくれば、無產婦人關係の離合についても必然の波が起るだらう。

そういふ中で、冬樹のやうな心持の自分を發見する事は、一の皮肉かも知れない。が、それはともかくとして、明日も明後日も、婦選のおかみさんとして、お客の應待、印刷屋の掛合ひ帳面つけから、お金の工面まで、飽まで元氣に駈け廻る私に何の變化もないのである。



## 赤松常子氏

（労働婦人聯盟）

×月×日

洗濯をした足袋をはきかへて、歯がへをした足駄をつっかけた足下から、健康そうな朴歯の音が、私の心を初冬の晴れ渡つた空の様に引しめる。

「今日の私の仕事は……」

プログラムは、カツチリと胸のノートに組まれた。純情と直進とが、私を私の持場へ吸ひつける。

×

今日又、仕事場の壁に、眞赤な太い字が生々しく押されてゐる。

「東京セルロイド會社の兄弟は起つたぞ！
この寒空に同志の首は飛んだのだ！
同志を見殺しにするな！ 我等は生活權を守る爲に敢然と戰ふのだ！ 兄弟の應援の熱き手を待つ！ セルロイド爭議團」

いろ／＼と押し上る潮のウネリが、私達兄弟の腕によつて爆發して戰ひへ、戰ひへ。私は敢然と爭議團本部に掲げられた、不正邪惡に抗する鬪爭と團結の旗の色を、目の裏に、更に胸の奥に熱く思つた。

×

赤インキの染まつた指から、やつと機關紙の校正のペンを投げた。しかし私の良心は、もう一ぺん校正の見直しを命じる。が、さつきから傍に待つてゐる、印刷屋の小僧さんの目に對しては、私の良心は早く渡せと命じる。

「待たしてごめんなさい。もうすぐですから」

一寸云ひかけ乍ら、重心を失つたカラ／＼の眼で、赤い校正の箇所を大急ぎで拾つて、見直しをして行く。やつと渡して解放された心の隅から又、いよ／＼出來上つて手にのせた瞬間の心配が擴がつて行く。

サア校正はとにかくおしまひ。之から群馬行きだ。午すぎの陽が、淡々と空に充ちてゐる。エプロンをぬぎ投て丶、出かけ様とした所へ一片の白い紙が渡された。

「イヨ／＼セントウカイシス。福山紡織爭議團」

私は暴風におそはれた様に、いろ／＼の感情と理性とが一時に渦巻いた。風雲急を告げては居たが……「とうとう……」

私は三百里の遠い空の一千三百の同志姉妹の全體の興奮を感じた。そして又一人一人の姉妹の聲を、顔を思ひ浮べた。房江さん、夏ちやん、朝ちやん、政ちやんの熱した顔を。私は徹底的に彈壓の刄で押しつぶされた信州岡谷の慘ましい去年の血の爭議の記錄を思ひ出す。私はすぐ飛んで行かねばならぬ。行きたい！ しかし私は今日群馬に待つてゐる姉妹の事を忘れてはならない。群馬の伊勢崎に近い境町に、六十人の製糸の姉妹の可弱い腕が、もう二ケ月に近い日數を、やはり階級戰に戰はれつゝあるこの爭議について珍らしい事は、戰ふ相手の資本主が全然姿をかくして行方不明になつてしまつて、警察へ搜索願を出して搜して貰つてゐる仕末である。だから工場も寄宿舍も爭議團本

部に占領してゐる。官憲も不正惡辣な會社のやり方に呆れてゐる位だから、さしたる彈壓もない。たゞ困つた事はこの惡資本家に資金を貸した附近の農家の人達が、借金を取る爲に、工場の建物にかけてある五萬圓の火災保險に目をつけて、何時放火をするか解らない事である。爭議團にしてみても、三ケ月も給料を支拂つて異れず、行方もくらましてゐる相手不明の今となつては、せめて工場を仕末した金でも取らねばと思つてゐるので、唯一の財産の建物を燒かれては困る。だから、爭議團で工場寄宿舍の建物を守つてゐる。毎晩男の人は外廻りを、姉妹は内廻りを、夜警隊を組んで不眠不休で見張つてゐる。今迄もこの地方にはこうして崩れて行つた會社の例もあつて、男工女工も泣きねいりで、働いた正當の賃銀を貰はず、次から次の工場へと渡つてゐたので、この工場主も、姉妹達の一人減り、二人減つて散つて了ふのを待つてゐるのである。が、組織された組合員は最早やその手には乘らない。飽く迄正當の要求を提げて堂々と頑張つて戰つてゐるのである。

×

東に西に、正しき叫びをあげて、勇敢に戰ひ進む姉妹の足音が、促々として私の胸を打つ。

東武線の沿線には、やがて桑畑がはてしもなく擴がつて來た。伊勢崎銘仙の本場へ近づいたのであらう。私は暮れなづむ武藏野の平野を北へ北へと走りつゞけてゐた。



久布白落實氏
(基督教婦人矯風會)

十二月六日(木)

午前九時出勤する。

久し振りにちよつとした閑暇が出來たので、事務所の整理をした。

正午の祈りを職員一同と共にす。

午後一時から、わがキリスト教婦人矯風會の四十一年記念會に出席した。小崎會頭、ガントレツト林、兩副會頭をはじめ東京各支部の代表者がみな出席して、嚴粛に、而も希望に溢れて過去四十一年間のわれらの足跡を顧りみた。同時に今後ます／＼全國廢娼のために邁進せむことを誓ふ。

午後四時、少し早くこの會を外づして廓淸會と矯風會との聯合にて成る、全國廢娼期成會の常務委員會に出席した。

さき頃京都地方迄行つて來た運動の經過報告をし、又諸氏より埼玉、長野、靜岡、秋田其他各縣に於ての期告を詳細に聞く。その内に埼玉の方の運動に出張してゐた同志の者が歸り來りて、同地縣會で最近燃え上つた廢娼建議案がとう／＼通過したとの報告に、一同歡びに充ち、全國各地の同志にたゞちに電報で知らせる手順を取る。

考へてみると群馬縣會で廢娼案が通過して以來、三十有餘年以來のことである。全國廢娼の特別運動を開始してから二年半。初めて第一の勝利を埼玉縣にみた。何といふ歡喜であらう。而かも聞く處に依れば、三十九人の内三十八人までが起立して贊意を表したといふこと、壓倒的な力である。

願はくば直ちに全縣下廢娼のために實行に着手されんことを望んでやまぬ。



佐野すゞ氏
（職業婦人協會）

晝の休憩時間に、例によつて五六人椅子を持ちよつて咄しだした。

「木曜日に職業婦人協會の例會があつたのよ。正田淑子先生が極くくだけて、アメリカの職業婦人の生活や職業狀態を面白くお咄下すつて、後で太平洋婦人會議の模樣などもよくお話になつたのですが、斯う云ふお話を聞く度に私達の立場を考へて、日暮れて途遠しと云ふ感じが泌々味はされるやうね。」

「ですけれども私達もよくこゝまで浮び上つて來たものね。今から十年前私達の職業を持つた頃を振返つて見て、時代の歩みもあるけれど矢張り私達の力と云ふものもハッキリ感じられるわ。」

「然し今の所では折角浮び出はしたものゝ、行き處が判らないと言ふ形ぢやない？ 仕事の上でも男子に比して劣つてゐない事だけは認めて貰つても、その一歩前で私達の前進がピッタり止められて居るのぢやないかしら。」

「その一線を打切るのが後進の人達の私達に求めてゐる犧牲ぢやないの？ それには職業婦人が皆な手を握り合ふことだけれど、この點になると女は全く駄目ね。」

「女は性格的に洗練が足らないから、一人々々孤立の生活になり勝だし、感情も破れ勝で、何もかも、どうにもならない事の內に押込めて仕舞ふけれど、どうにもならない事などさうザラにあるものぢやないわね。ホントウにどうにもならない事以外のことに私達は力を合せて戰ふことにしやうぢやないの。」

　電氣時計の針がピッタリ一時を指した、執務前に、主任から、年末の仕事に就ての申渡しがあつた、二十八日の御用仕舞いまでに、やつてしまう仕事が、御大典で可成迫はれて居る所を尙十三日の市の奉祝が休みで影響されるから、十二月は例年よりよほど切りつめられる。其の上私達十五人の一組は二人の病身缺勤者があるのだつた。――私達は市電氣局電燈課の女子雇員です。

　みんな元氣よくそれぞれの部署に着いた。紙上に躍る數字、指先を走るそろばんの珠、私達の活動の幕が再び目醒しく開展された。

×

　電車の中で漸く體をはさんで呉れる座席を占めた時私は初めてホッとした。

　ゐる、ゐる、私達の仲間、何と云ふ大ぜいな職業婦人の仲間だ！「皆さん」私は立上つて斯う呼びかけたい氣持で一ぱいになつた。

　斯うした日は何もかも愉快なものだ。

　私達の仕事は何よりもまづ職業婦人をつなぎ合せることだ、心を協せ力を一ツにして私達の世界を切開いて行く大きな力を作り上げる事だ。昂奮に近い感情を抱きしめながら郊外の驛をもまれるやうに構外に出された私は、よろめく足を踏みしめて、ハッキリ口に出して斯う叫んだ。

「信念と力のある所に明日の光がある。」



## 山田やす子氏

（社會民衆婦人同盟）

あわたゞしい思ひをして、午前八時信越線の一隅に腰を降ろしてから、講演の構想を語つたときは、やつと畫近くであつた。

其處で自分の前に田舎のをばさんの腰掛けてゐるのに話しかける餘裕も出來た。材料代パン一斤八錢也を投じて作つて來たサンドウキツチ（ハムサンドウキツチであつた事は確かだがハムは友達からの到來物）を出して此のをばさんにサンドウキツチがたべられるかしらと懸念しながら（自分の母のことから推して）

私「をばあさん　これ上りますか、肉が入つてますが――」

婆「えゝ、結構です。大好きです。」

といふわけで二人でサンドウキツチ腹をこしらへた。無産運動をしてゐる身には、秋色を眺める心の餘裕も更になく、をばあさんとの話に興じてゐる間に、伊勢崎に着いたので私は降車の身構えしてゐるとをばあさんの曰く、

婆「では握手をしてお別れしませう」

私「おや、これはしたり、握手ですか、隨分ハイカラですね」

田舍ばあさんから先に握手を求められて度膽を抜かれたことの第一、

×

伊勢崎驛へ着いたら迎ひに出てゐるからと黨本部がいふので、例の私、どこへ行くのやら指定の汽車に間に合せたことはたしかだが、迎ひらしい人がゐないのでさて「おいらの行くとこどこだんべ」若し行き先きが分らなかつたら大變、かへりの汽車賃は嚢中七十錢荷物なら運賃先き拂ひですむが、人間の運賃先き拂ひは滅多にない、さて何んとしたものか、と度膽を抜かれたこと二度目。

×

伊勢崎での社會民衆黨支部講演會はやまつて前橋のみであつたといふことをやつと警察できゝ出して、夕方前橋驛についたとき、前橋の黨員約二十名停車場へつめかけて、辯士の鈴木文治氏も私も行かないので、激昂クライマックスであつた中にボンヤリ降りた私は、包圍攻撃の雨に度膽ぬかれること、これで三度目。

日勞黨から分離して、社會民衆黨に入つた千四五百に餘る多數黨員を心から歡迎すべく、又彼等の出所進退が、あざやかであつたことを聽衆に訴ふべく、母心を出して大熱辯を振ひ出して分配問題から社會民主主義問題に至る途中、何んの其の筋のお氣に入らないはずのない話をしかけて約十五分、

私「社會民主主義といふのは……」

警察署長「注意」

私「社會民主主義といふのは」

「注意」

私「社會民主主義といふのは」

署長「注意」

突!!

「中止」

×

何んのことだかさつぱりわからない。社會民主主義の説明をしようといふのに「中止」を食はす警察署長があるのかと其のわからなさ加減に度膽をぬかれること四度目。

×

原稿を送れと奥主幹の懇望であるのだが、とても暇がないのでこんなことでも書いて責任を果さうと思つてゐると、朝六時速達で原稿の催促に度膽を抜かれること五度目。

×

これで度膽抜かしは放免して貰ひたい。



村山文子氏

（職業婦人社）

一寸の暇をも惜んで、かなりの手數と骨折をつひやして、やつと作り上げた二萬枚の募金袋は私たちにとつて大事な〳〵寶。それを送り出すときは、丁度戰に行く勇士を送る時のやうないゝえもつと強い愛兒を始めて人の世の旅に立たしめる親の心のそれのやうな、深い祈りと感謝に滿ちた心持だつた。

それだけに、各方面から集つて來る情報は細大洩らさず目を通し耳にしなければ氣がすまない。昨今の事務所は全くこの話で持ちきりである。

今日も今日とて、夕方から事務所に顏を合せたみんなの間に一しきり情勢報告の話がはづむ。先づ元氣よく口を切つた×さん、

「今日はとてもいゝ日だつたのよ。××生命の受附のKさんをおたづねしたら、親切にこんなにも集めといて下さつたのよ。そして又追加を五十引受けませうつて、あんまり氣持がいゝので、つひおしやべりしてしまつたわ。それから又いろんな所に思ひがけない同情者があるんで、すつかり元氣になつてしまひました。さうさう、これをごらんなさい。これおひるにお食堂でお箸の中から出て來た辻占なのよ。ほら「勇敢におやりなさい」と書いてあるでせう。私ほんたうに勇敢にやりますわ」

とまさに氣焰當るべからずといふところ。側からお留守居役のKさん

「それはようございましたね。サアお茶が入りましたよ。お火鉢のそばにいらつしやい。さぞさむかつたでせう。こちらでおあたりなさい。こゝにもこんないゝハガキや手紙が來て居ますよ。」

とおもてなしのいゝこと。お茶を飲み甘いものなどいたゞきながら、又一しきりその日の經驗談に花が咲く。そのうちに奥さんも乘り出して、

「私も今日は嬉しかつたのよ。さうね二時頃だつたかしら、事務所に來たのは……。それから一寸手紙を書いたりして居ると、ひつきりなしにお客樣でね。それがみんな「家」の事ばかりといふ譯なのよ。とらこんなに袋を世話して下さつたのよ。（指さゝれた机の上には幾つかに分けて重ねられた袋が、大きな場所を占領して居た）みなさんがとても熱心にして、話しこんで下さるので、すまない事だつたけれど、私、お約束だつた××さん處に、とう〳〵お伺ひできずにしまつたの。×さんも××さんもみんな一生懸命にやらうぢやないの」

と熱を帶びた調子ではげまされる。そしてみんな無言のうちにも、きつとやりとげませうとかたく心に誓ひあつた。

來信を整理し、帳簿に記入をすますと、もう大分おそくなつたらしい。にこやかなKさんの笑顏に送られて事務所を出ると、外は師走の風が冷たく吹き荒れて居る。

年内も指折るとはや幾日もなくなつてしまた。二十日までには「婦人運動」を讀者諸姉のお手にとゞけなければならないし、「家」の募金も目鼻をつけておきたいし、したい事ばかりで氣のせく事おびたゞしい。矢の樣に巷を行き交ふ自動車、自轉車、あゝ昭和三年も暮れてゆくのだ。



織本貞代氏

（全國婦人同盟）

身邊雜記を、といふ奥女史からの御註文をうけて、自分も一度落ち附いて身邊雜記をものする様な暇人になつて見度いと瞬間的に考へたのですが、そのまゝ忘れてしまひました。今日(十日)奥女史のお顔を見てさいそくをされて是が非でもといふお話に今夜は廻り道をするのをよして少し早や目に歸つて來たのですが、病中の主人に「天下の形勢」を語り終へて夕飯をすまし、さてペンを取つて見るとまさに午前零時四十七分、此の多忙な一貧女性に無理な註文をせらるる奥女史を、一寸恨んで見度いのもあながち心狭き故ともいへますまい。

私の忙がしいのは今に始まつた事ではありませんが、でも或る友人が遊びに來てゐて、私の足袋の繼ぎ接ぎをやるのを見ながら「あなたもそんな仕事をしなければならないのですか」といつた時には、なんとのん氣な人だらうと流石に腹立たしく感じたのでした。

起床、朝食の仕度、日本勞農黨本部出勤、紡織勞働組合の仕事、全國婦人同盟の仕事、研究會(その他)歸宅、夕飯の仕度、就寢、これが日課です。これに讀書がつき洗濯がつき、來客がつく、時には病人の世話がつく。折にふれては餘りにも忙がしすぎる駑馬の如き自らの姿にしみ／＼涙することもないではありません。

或る日のブルジョア新聞が流謫地で自叙？レオン、トロツキーの「革命的活躍」をものしつゝある、彼れトロツキーを評して「革命家も自ら自傳を書くようになつてはおしまひだ」と云つてゐたのを讀んだ事があるように記憶してゐます。レオン・トロツキーほどの大革命家を氣取るほどの大それた自惚れは持ちませんが、これ等のエピソートが時に淋しい骨休めの一手段として念頭に浮んで來る所あたり、帝劇を、歌舞伎を、最高の音樂をと、望みのまゝに求めて充されつゝあるブルジョアの生活と餘りにも甚しい懸隔のあることを考へさせられないではない。が、それ等のことすら考へる暇のある時はまだ幸かも知れない。疲れ切つた體を速力の小氣味よく早い最終の電車に托して「あゝ、いゝ音樂が聞き度い」と叫び續けた此の三年間が少し痛まし過ぎると云はうか。

六感神經の末端まで働かして、さて漸くにして纒め、知り得た「天下の形勢」に副うて、その最も正しき線を我歩めりと思ふ時、何にも換へ難い愉悦を感ずる。一本の導火線に噛りついて、その線の先端が××に通ずるか否かを常に疑ひつゝ生きて行く身を人々は憐れといふか。さはれ、矛盾と腐敗の現社會に儚なく喘ぎつゝなほ斷ち切らん鎖の一環を見出しかねたる姉妹の餘りに多きを悲しまないでは居られない。仕事の洪水の中から、私は常にこの事をより愛へ、此の悲しみを去る爲に小さき努力をなほ捧げ續けようとしてゐるのだ――。

駄文を草する間に丁度一時間を經過した。今やまさに午前一時四十七分、僅かの眠りを貪る前に、私はまだ今日の新聞に目を通さなければならない。「餘り忙がしい人は長生きが出來ない」と祖母が云ひ／＼致しました。それを思ひ出す時、只一ツあり／＼と浮ぶ幻は故郷に殘してゐる最愛の母です。



村上秀氏
（東京聯合婦人會）

「又御電話ですよ」やうやくペンを操つた頃には、又受附の××さんが飛んで來る。受附と事務室の間をまるでマラソン競爭よろしくの體である。五十人が鹵簿を奉拜するために、今日で三日かゝりつ切りである。定員に滿ちても申込殺倒とは……夫々マークを封じ込んで、速達の判を押し、さて郵便局に飛んで行く、やれやれと見ると靴の横腹からやたらと寒さが浸み込んで來る。

明日の奉拜には當然事務どころではない。明夜の役員會の準備を、今日中に仕て置かねばならぬ。例年のことながら、もう今年も會務の精算をせねばならぬ時が來たのである。

記錄のページを繰つて行く。何か特別の催でも仕ない限り多忙な常務もないのだから、といふ理由も加へて、會報發刊のことを提議したのは、昨年の暮だつたが、さて今年は婦選達成デーを第一着手として、汎太平洋婦人會議に關する講演會二回、送別會、歡迎會、敍勳女子敎育家の祝賀會、御大典記念事業、工業地問題、市會淨化問題等、次々の催で、せつかく決議された會報發行の成績も、誠に貧弱なものだつた。が、只經濟的に獨立し得る自治を得たゞけは、大きな收穫だつた。

各種の問題に對しても、聯合婦人會の立場としては、徹底的運動を期することは困難であらうが、ともかく月々の委員會も二十人以上三十人位の出席があり、加盟關係三十七團體といふ盛況を記錄されてゐるのである。

小委員會の整理、明年一月の總會に關する件等、當然明夜の問題としなければならないが、會館建設の件も是非具體化してほしいものゝ一つである。

機關誌を、新聞紙法によつて月刊とする件は去る十一月の委員會で決議された。婦人界のリポートを作り度いといふ年來の希望が、やうやく達しられたわけである。がかう多忙では、中々準備も出來ない。何より先づ共働者がほしいこれも明夜提案仕度いものゝ一つである。がさて適任者といふ段に成るといつでも苦勞する。

×

早稻田の終點から約十五分、家には珍らしい友人が待つてゐた。「まあ……今日はおごれるわ……お甘美しい肉でもね……一寸待つて…」洋服を着てゐると時々女學生と間違へられる。二人の店員は顏見合せてしばし「シモフリの上等ですから一圓六拾錢」と答へた。「さうお目出度うもないのよハ、、」飛び出しはしたが、次の店のものは何とまあ櫻にも等しいものであることとよ、次の店も！ 歸つた時はこの寒空に汗でぐつしよりだつた。直接の利害なればこそ、お芽出度くなささうな顏をする苦勞、何とまあ大したものである事よ。友は苦笑して言つた。

「暇つぶしも色々でね、あの××さん知つてるでせう。演壇で中止を食つたのがお得意で、盛んに檢束されたがつてゐるといふ噂よ！」



## 高橋千代氏

（婦人參政同盟）

十二月一日

東を枕にした頭上の窓硝子に、曦光があたつて今日もお天氣の好さを思はせる。今朝は民法だつたつけ、と、床の中で考へてるとカタコトと女の足音、ハテナ今時分から、凝然と耳をすますと、

「御免下さい」アッ××さんだ。

「御免なさい、こんなに早く伺つて。實はこれから初臺まで行くんで出かけをお寄りしたのよ。だからこゝで結構」

「でも寒いでせう、鳥渡お上んなさいな」

滅多に會の方に、顔を出さない古い婦人參政同盟會員が訪ねて呉れる事は、それがどんな時刻であらうとも、どんな用事であらうとも自分にとつてはどんなに嬉しいか知れない。會へば用談杯そつちのけにして、昔のなつかしい思ひ出話に花が咲く。

「でもよくこゝまでこぎつけて來たわね」

「そうね、つまり意地よ。努力一つね。貴女もこれからちよい／＼被入しやいよ。」

「だつて案内もよこさないぢやないの、脫會屆けも出さないのに」

こんな不平きくことも嬉しい、子供が食事を知らして來たを機會に友は歸つて行く。學校——女子法政學院——にいつたら、先生がおやすみだつた、生從の一人が、

「先生、明治大學にも今度女子部の法政科をおくつて新聞に出てますね」と心配顔、私も實は氣にはなつてゐたのだ。まだ確定はしてゐないんですよ、と慰安を與へておいてすぐ其足で明治大學に○○先生を訪ふ。

「何つ穗積さんが力入れるてつて？ とんでもない事だ、二時間程出てくれつていふのさへ斷つてるのに」

如何にも意外といふ顔付、私の頭の中では春の新聞記事が渦を卷く。今日明治では否決されましたよと報告を受けた翌朝「明大法學部女子部開設」と大きな標題で某新聞に書かれた。一面好意持つ人があれば、他面妨害を加へんとずる人がある。敵のない者には味方もない、成程ナと今更の如く考へさせられる。

今日は第一土曜だ、學校は學校、飛ぶ樣にして參政同盟の事務所に行く。定例幹部會である

「武部さんから缺席するから、共同委員會の報告は中林樣よりおきゝ下さいと端書が來ました」

「それでは御報告申上げますが、御報告に先だちまして一言謝罪、いゝえ釋明致します。この前の共同委員會におきまして獲得より出ました案に對して云々」と長い釋明の後この位の權限はあつて然るべきだと思ひますが如何でせうとある。それより二つの問題に對する報告をきく。

「次の共同委員會についての協議事項は御座いませんか」

「エヽ、只請願デーに出て頂く十五名の委員さへきめといて頂けば好いんです」

「では次に移りまして、長い間の懸案であつた內規を拵へませう」と五ケ條の內規の草案かく三人寄れば文珠の智慧とか、十人もよつて拵へた內規である。



奥むめお氏
（婦人消費組合協會）

十二月八日

原稿を書きつゝ夜を明かしてしまつた。曉方の寒さにとう〳〵堪え切れずなつて、子供たちの寢床へもぐり込んだら、「冷たいッ」と悲鳴をあげて前後して二人ともに起きてしまつたので、結局一睡もとらず。例に依つて、本讀みを仰せつかつて兒童文庫や、幼年クラブの活字を夢うつゝで讀みきかせてやる。

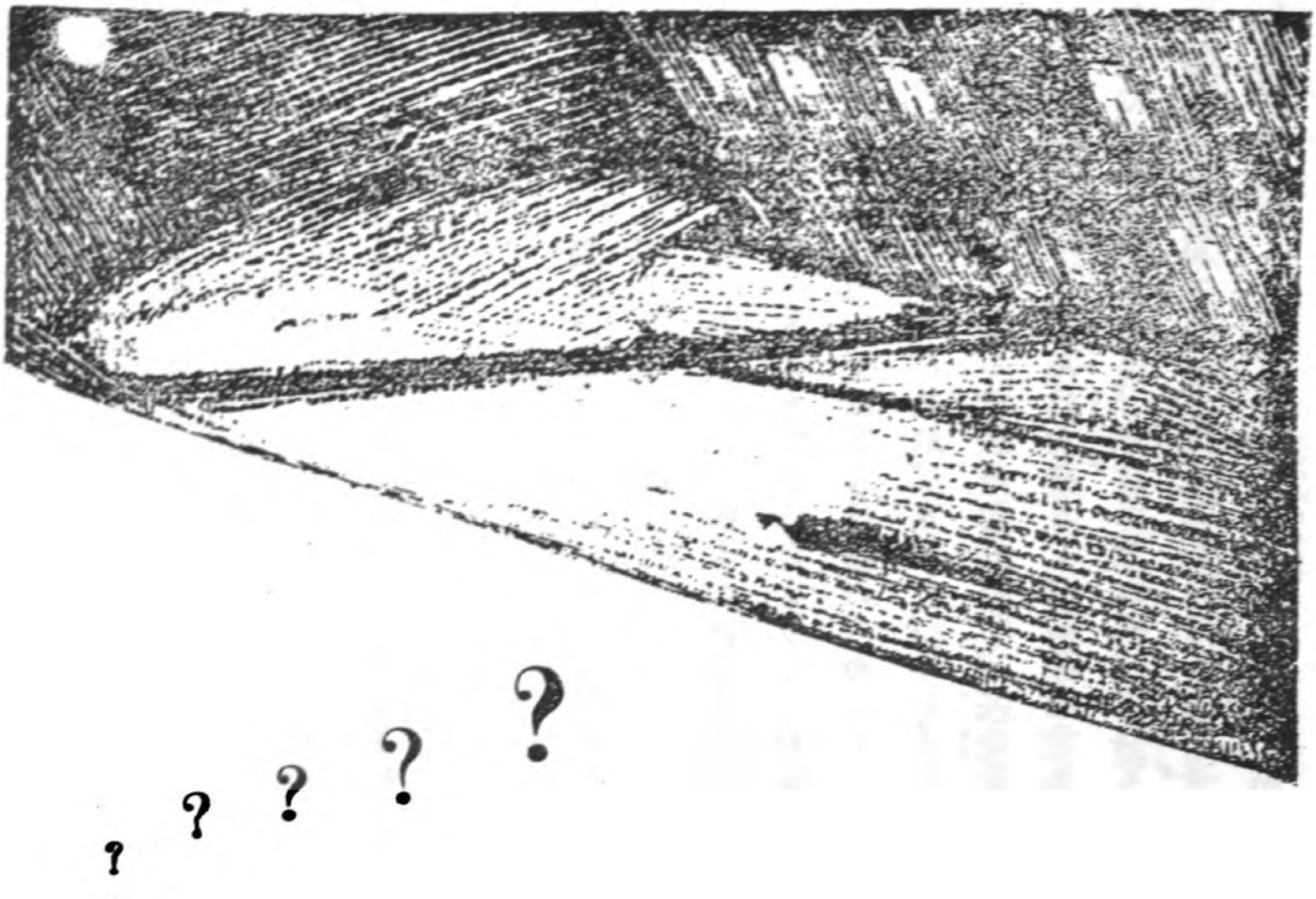
八時半、×氏と會ふ約束の時間が迫つたので急いで電車に乘つて事務所へ。×氏未だ來らず來信をよんだり返事を書いたり、加藤さんより昨日一日の報告を聞いたりしてゐる內に、九時半に近づく。やむを得ず出かける。

十一時半すぎ、電氣局で村山さんと落ち合つてみんなで一緖に賑やかに晝食、此處は顏なぢみが多いのですぐにお尻がすわつてしまひ易い危險地帶。暮になつて來たので事務の整理で職業婦人諸氏はみな忙しさうだ。

それより京橋へ、消費組合協會で取引してゐる毛糸代の支拂ひについて△氏を訪問。氏の好意に依る剩餘金を以て、來年度は大きく事をまわして協會の趣旨徹底のために働きたいと思ふ。「職業婦人の家」の募集金袋二〇〇枚をひきうけてくれらる。

午後二時、アルペール、トーマ氏歡迎會に學士會館へゆく。久し振りの友人や先輩諸氏に大分多く會つた。和田富子氏は大事な用件を持つてあなたを探してゐた、と、いつて隣り合つて座つていろ〳〵話し合ふ。氏の母上は消費組合協會の熱心な共鳴者である。さきにも協會の仕事を、もつと廣く一般婦人の間へひろめてゆくことについて隨分長く話し合つて相談した人である。正月用のみかんや、鮭や、かずの子やその他日用雜品を、共同購入することについて大至急懇談をしたいとの事であつたので、とにかく外にも、協會の委員諸氏を呼んでみんな一緖に相談しませうと傳へて貰ふ。協會が發會してから未だ半年にしか成らないけれど、大井、戶越、本所、牛込、四谷、高圓寺、東中野、青山、瀧ノ川、本鄕、麴町、池袋その他レンラクがよくついて、熱心な會員が出來たところが大分に多い。これに、各地方から共鳴して來られた人たちを加へると一層、收穫の多い半年だつたと云ふべきであらう。來年はこれだけの基礎を芯棒にして東京ぢうに聯絡提携の網が張つてゆけるであらう。各地方の會員たちの力をもつと大きくして、早く何とか生かしてゆきたいものと考へてゐる。

扨、かへりに神保町で夜食をとつて事務所に立よつたら都合よく、千葉さんが來訪。加藤氏村山氏と四人で、協會のこれからの仕事について種々意見をたゝかはし合ふ。結局私が一番お說法をしたわけになつたやうであとで恐縮したが、とにかく、目にみえる仕事をすることを急いではならぬと思ふ。あくまで協會の仕事は婦人と經濟方面の實際に就いて、被支配階級としての全體の婦人が協力してゆく樣に道を開拓し、聯絡提携して鬪ひ進むことだと思ふ。



# 女で夜の明ける映畫界

立花高四郎

×

お金の儲かる、評判になる映畫の物語で、戀、性の問題、三角から出來るだけ多角の婦人關係、母性愛、さては日本で公開不可能な姦通事件や、破倫な戀愛沙汰まで入れて、其等と絶對に無關係、其等の內のどれかの內容を少しも持たない映畫が澤山あつたが、餘程丹念に、長い時間をかけて調査しなければなるまい、三十六の劇的境遇も婦人と結び付いてこそ面白いものになる、イヤ興行映畫では婦人問題を取り入れなければならぬと、一大鐵則の如くなつて居るやうだ。これ女ならでは夜が明けぬ譯である。

×

日本では、映畫見物中、大學生が重要な位置を占めて居るらしく見えるが、婦人客は映畫業者は非常に大切にする、と云ふのが婦人映畫フアンはシングルで見物に來ることは、特

別の場合を除いては滅多にない筈である。のみならず理屈ヌキで、スクリーンを見詰めて、極めて安々と泣いたり笑つたりして呉れて、俳優後援と云つた場合には、宗教的信仰をさへ持つて、眞劍に常設館の宣傳事業を手傳つて呉れる。迚も我等男子の想像も及ばぬ所である。私は時に何々後援會の大會などに出席して見るが、實に驚く可き光景を見せられる時がある。

×

今日でこそ、種々な社會運動の宣傳に、映畫を利用することは珍らしくも何ともないけれども、一九一二三年頃、米國婦人參政權運動に、運動者の一婦人が俳優となつた映畫を使つて相當成績をあげたことがあつたさうで、有繋は御轉婆の御本家だけある。日本ではさうは參ゐらぬいろ〳〵な理由があらうけれども、いつになれば左樣な試みをされるか、精々お早く拜見し度い。尤も映畫會を催して、基金を作ることだけは、最近御上手になられたやうで、慈善事業なぞ映畫會を利用しないのは嘘である。何故かなれば、自分も樂しみ、樂しみ乍ら善行を爲すことが出來るからである、世智からい世だからである。

×

アメリカの映畫檢閲がキッスの切除から開始されたことは先般ラヂオで放送したが、其處まで問題を硬化したのは、キリスト教婦人團體が社會問題として騷いだからで、クリスチヤン・サイエンス・モニターはかつてそのことを詳報したことがある。婦人雜誌の性記事では近來稀に見る神經過敏サを示されたが、活動寫眞方面は天下太平、無關心なのか、映畫が心配がない程クリーアで、ホールサムであるのか、映畫なぞ見るべきものでないと、問題外に置いて居るのか、モガは映畫が製造したとも言はれるでないか、離婚事件の多いのもその故である、イヤそれとは全然無關係ではないと云ふ社會學者もあると云ふではありませんか、お閑があれば映畫の御研究をお勸めする。殊に眼鏡をかけて、スクーリンの近くでなければ、繪が見えない所の年輩の方々こお勸めする。

×

主婦として、お子サンを持つて居る主婦の方々は、子供の爲めに映畫の特別研究が必要であるが、自己修養の爲めに映畫を見物する場合に於て、映畫のよみ方位は心得えて居る必要がある。映畫の何處に榮養價値があるか位知つて居られて

御損はない、時間つぶしや、映畫見物を何かの方便に使ふ樣な方は話にならぬが、映畫の物語ばかりを面白がる方々も話にならぬ、丁度本の表紙が奇麗だからと云つて嬉しがるのも同じだ。であるから映畫改善運動なぞにはお手を染められないそれが結構であるかないか、私等の知つたことではない。

×

映畫脚本作家として、アメリカにエリノア・グリン女史あり、日本に水島某女史ありするが、シナリオ・ライターとして婦人は非常によいさうである。つまり頭腦が綿密で、コンチニユイテイと云つた七面倒臭い仕事も、コクメイにやり遂げるからである。閨秀作家も文壇、劇壇と限らず、映畫劇壇のあることを知つて頂き度い、兒童向の映畫なぞ、閨秀シナリオ・ライターが頼もしいのでないか、時々お招伴に、小唄なぞ黄色い聲で唄はれる位では物足らない。伴奏方面だつて働き口が發見されないことはあるまい。

×

女優を志願して家出する田舎娘、都會のモガ、志成らずにアンダーウアールドへ進出するものが、日本にだつてないことはなからうと云ふものだ、其等救濟事業を先輩名女優の寄附金でやつて居る事例が、アメリカにあるさうだ。斯樣な新事業は起らない方が、日本婦人の爲めに名譽である。

×

容貌端麗で、魅力あり、物眞似上手で女優になり、錢勘定が巧くて、接遇の方法が巧妙である爲めに女給になる婦人もある、いづれも婦人の職業であるに相違ない。所で撮影所内に於て、映畫現像方面や、撮影臺本の鐵筆、版係等に婦人を採用して居る、松竹蒲田撮影所なぞ相當の人員が居る。前者は婦人の方が男子よりも能率、技術方面で至極良成績をあげて居ると云ふ話だ。だから女優にはなれず、女給にもなれずしかし映畫の香りがする仕事を是非やつて見たい、でなければ自殺すると云ふ婦人があつたら、左樣な仕事もあることを思ひ出して、自殺を急いではならない。

×

斯樣に婦人と映畫との關係を概觀して來ると、なか〳〵複雜なもので、單純ではない、然るに映畫に接近することを、趣味的にも、道德的にも墮落と心得える婦人が十人に一人位はあるやうだ、活動學をやつて下さい、そして明るい映畫の影響を受けて貰い度い。(三・一〇・二八)

# 亡者は悲しい

寺田鼎

私は子供の時分から今に至るまで馬鹿ばなしが好きで、馬鹿ばなしと來たら時と處を選ばずに、したり聞いたりする癖がある。恥づかしい次第ながら、何處に行つても不思議と、私は此の馬鹿ばなしと云ふやつを、屹度聞かされるのであるまた交際つてゐる仲間が、負けず劣らずの馬鹿ばなしの名人ばかりと來てゐるので、此の癖ばかりは仲々癒らない。

　馬鹿ばなしと云ふと思ひ出す。もう隨分昔の事ながら、私にとつては懷かしい思ひ出だ。

　或る時、私たちは大杉榮君を眞中にして、いろ〱馬鹿ばなしに花を咲かせてゐたのであつた。其の部屋は廣々とした西洋間で、ストーヴには火が熾んに燃えてゐた。私たちは窓の外にチラ〱降つてゐる雪を眺めながら、寒い事などすつかり忘れて、時々大きい聲を出しては笑ひ崩れた。



　馬鹿ばなしと云ふものは、いつも同じやうな話題を、とりとめもなく、くど〱と、くり返しくり返すものである。だから途中から聞いても、途中で止めて中坐しても、別に損などする氣遣ひは決してない。そのくせ、いやに花が咲きたがるのも馬鹿ばなしの特性であらう。大杉は殊に、馬鹿ばなしの名人であつた。だから其の時も、大杉が一人ではしやいでゐたと云つても嘘ではなかつた。

　しかし其の馬鹿ばなしもいつしか終つた。一人立ち二人立つて、一同がまだ降り止まぬ雪を衝いて歸つてしまうと、あとには大杉と私だけが殘つた。私は以前から讀みつゞけてゐた小說でも讀まうかと、傍に置いておいた「大菩薩峠」を取り上げた。(其頃はまだ澤正が此の芝居をやつてゐなかつた)

「何を讀んでゐる？」

　ふと大杉が訊いた。私は本の表紙をひつくり返して示した。大杉は例の丸い、大きな眼をギロリとさせてから、何時になく改まつた調子で云つた。

「君、亡者つてえのを知つてゐるか？」

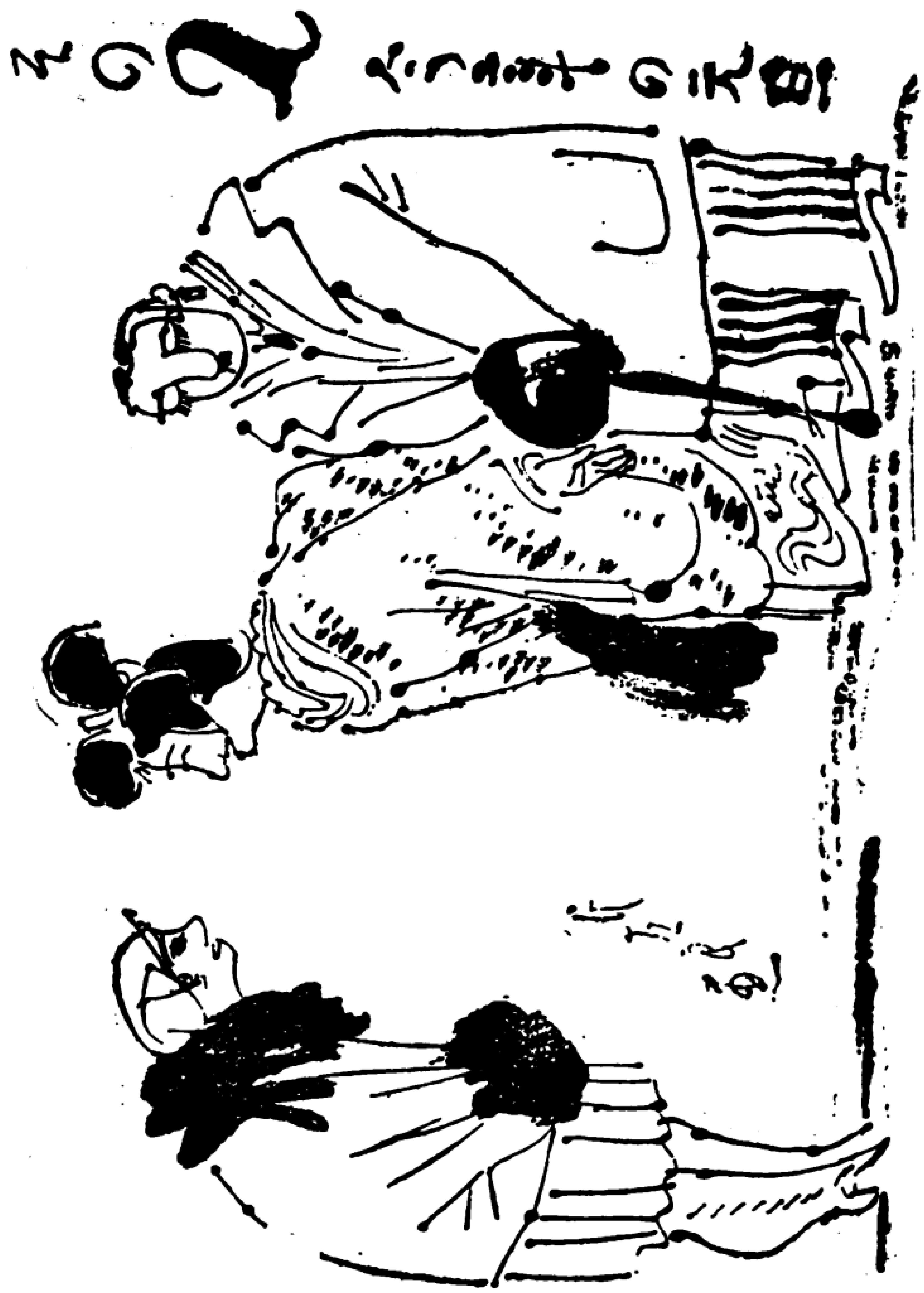
「エ、……？」と、私は怪訝さうにきゝ返した。

「亡者つてのはね、あれも出來、これも出來ると云つた風になんでも一と通りは出來るくせに、一藝一能に達してゐない

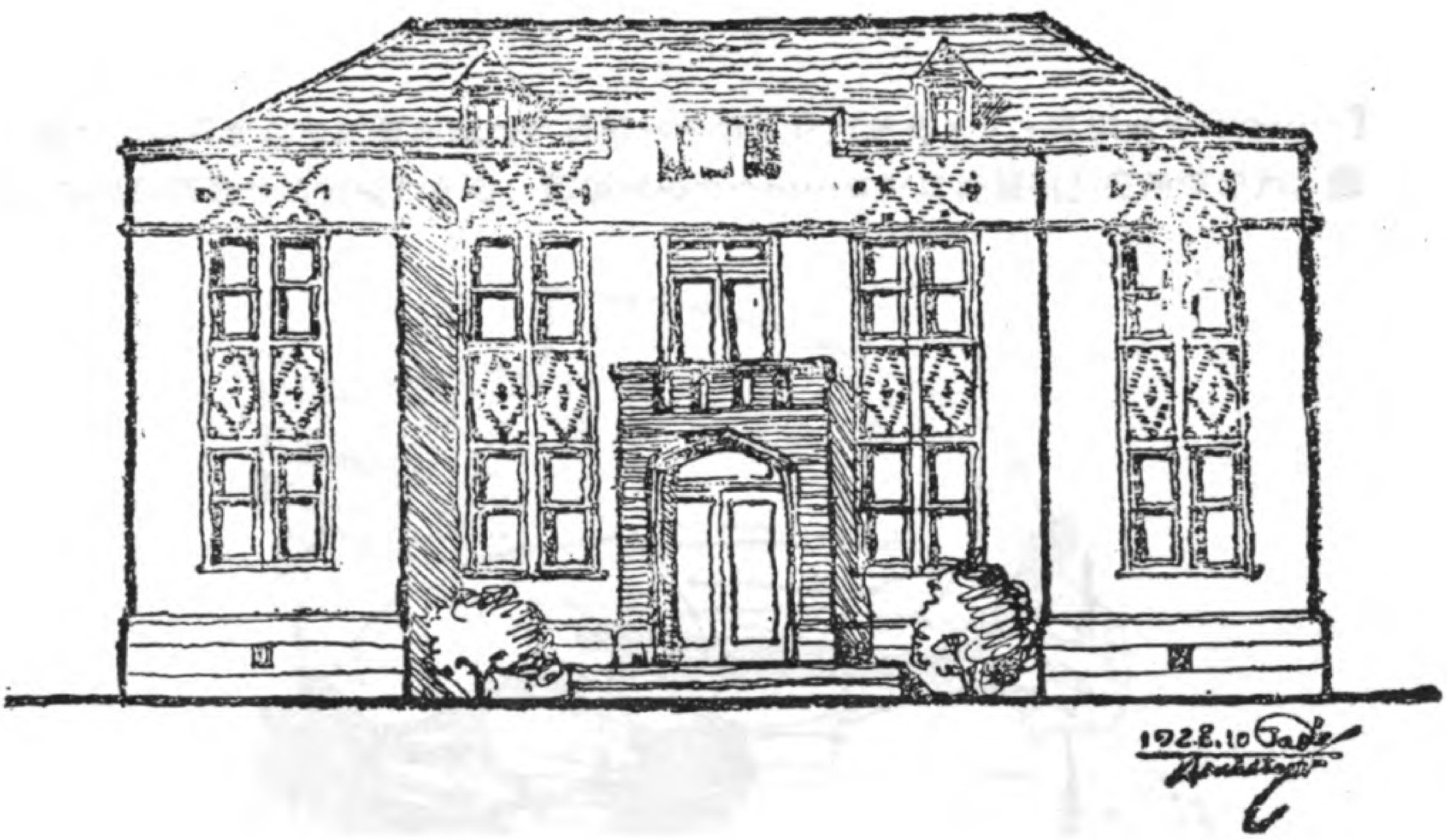
クツのことなんだ。それを亡者つてえんだよ」
「君なんかも其の亡者の一人だ。小說をよむ、役者の身元調をする、蜂を殺してフアブルの本を擴げてゐる、かと思ふと經濟學の本を眺めてゐる。英語もモノになつてゐない中にフランス語に手を出す。そんな事するからダメなんだ。
「そんな事したけりや、いくらしてもいゝ。だが、其の中に一つ、これはつてものがなくつちや何時までも亡者でゐなきやならない。馬鹿ばなしする時だつて如何だ。一番嬉しい顏してゐるのは君ぢやないか。あんな下らん事覺えてゐたつてタメになんかなりやしないぞ！
「馬鹿ばなしは、何時したつて、誰がしたつて同じ事なんだ一番、隙な時に聞いて置きやそれで澤山だ。馬鹿ばなしばかりは達人になつたつて威張れないからナ。」
大杉は眞面目になつて、やさしい氣持ちでかう云つて聞かした。ところが私は、生意氣盛りだつたからでもあらう、「何云つてるんだ、自分だつて名人のくせに、何時馬鹿ばなしの席を中坐した事がある？」と胸に問ひ腹に答へて、いゝ加減に聞き流してしまつた。
　爾來、星霜は移つた。私は依然として亡者の域を脫しない何か專門の研究でもして、大杉の忠告に酬ひんと志した事はあつたが、生活のためと云ふ口實のもとに、腰かけのつもりで活動寫眞の仕事を始めたら其の足が洗へなくなつてしまつた。研究らしい研究は何一つ出來ない反面に、女のマツ毛の比較とか、キッスの技巧の觀察とか、男女關係と腕の變化と云ふやうな「婦人運動」の讀者には緣の遠い研究に夢中になつてゐるやうな始末である。本誌の奧さんに、是非何かと云はれて、謙遜ではなくて、眞實何にもかけませんからと斷つても、いや、ならぬときめつけられて、ヘイと引受けてはみたものの、眞逆キッスの技巧と其の效果など書く譯にも行かない。せめては大杉今や亡く、「それみろ」などゝ云はれないで濟む今を心細くも喜んで、亡者らしい悲しい思ひ出を述べるまでの事である。




『こないだ結婚した家内です、何分よろしく……カラロ不調法で出ぎらひで、新年廻りだけはやつと引張り出して來たようなわけでハ、、、、、何分よろしく……』



『これ迄年期勤した主人ですの、何分よろしく……カラ口不調法で出ぎらひで、新年參りだけはやつと引張り出して來たようなわけでオホヽヽヽ何分よろしく……』




## 一人のこらずの婦人の協力に依つて「家」を建てたい

いよ〳〵「職業婦人の家」を建設するために募金運動に入りました長い間の願ひであつたこの「家」が大多數の人々の共鳴とお加勢に依つて一日も早く完成するやうにと願はずにゐられませぬ。家は、

木造二階建（總建坪八五坪）總工費及び設備費一、〇〇〇〇圓

一萬圓といふ豫算に對しては、かくも重要な仕事に使はるべき家の建設費としてあまりに小さすぎる事を注意して下さる方が尠くないのでありますが、然し、この「家」の計畫を發表して以來怒濤のやうに八方十六方から浴せかけられて來る期待と激勵のつぶてはこの「家」をはち切れさうにまで精一杯に生かして用ひずにはおかぬでありませう。私たちは實に、その力に驅り立てられ追ひ立てられて懸命に働いてるのであります。「家」の内容は、

一、娛樂休憩のための靜かで快い部屋と相當の設備、二、圖書雜誌新聞ポスターの閲覽室、各種講習會講座研究會協議會等に使用する大中小室、科學的に設備整ひたる共同炊事場及び共同洗濯所、簡易宿泊室應接室、食堂、賣店、事務室、婦人相談所等を含む。

どうぞ「職業婦人の家」のために寄附を申込んで下さい。二十錢袋を充たして送つて下さい。あなたのまわりの方が一人殘らず募金に應じて下さるまでお口添をたのみます。お知らせ下されば何時でも出かけてゆきます。寄附申込み書及び募金袋發送の準備も出來てゐます。

**この「家」の計畫を全ての婦人に傳へて下さい！**

◇◇讀んだものから◇◇

# 虫の世界の戀愛

松村松年

　蜘蛛の中に蠅虎（はへとりぐも）と云ふのがある。その雄は、雌の前で前脚を擧げたり伸ばしたり、からだを曲げたり左右に飛んだりして一種の舞踊を演ずると、雌は今まで食慾のためにかくれてゐた性慾の本能が喚起して來て雄に近づいて來る機會を與へる。雌は、大きな六つの單眼を持つて雄の舞踊を見物してゐるのであるが、雄は、雌の心の柔ぐ樣子を見計つて巧みに雌に飛びつき、その目的を達してしまふと直ちに躍び逃げる。もしこの時戀々としてまごついてゐると、むろん雌に喰はれてしまふ。元來、蜘蛛は食肉性の動物であるから、友食ひをすることを何とも思つてゐない。亭主をさへ、用がすめば食つてしまふものであるそのために、雄は中々雌に近づけぬのであるが、生殖機能の力は恐しいもので、生命がけで飛びついてゆくのである。

　元來雌の身體は大きく雄の數倍あるから、交尾したあとの疲れ切つてゐる雄を捕へて食ふ位の事は何の雜作もないのだ幸ひ、雌に殺されなくて生き殘つてゐてもその壽命は僅かに一日か二日のことにすぎないのであるから、むしろ、雌に食はれて、その餌食となり、己れの種を宿した雌の保全のために貢獻した方が種族の存續には利益が多いわけである。たゞ全て生物には生きたいといふ本能があるから、容易に雌の餌食とならぬやうに逃げて飛ぶばかりである。

　臺灣や南支に蝎といふものが居るその雄は、熱心に新婚の床を自分で用意してさて自ら新婦を探し求めに出かけるのであるが、新婦を得た幸福な新郎は、兩々手を携へて床入りをするまでは實に美ましい程仲のよい新夫婦である。

　然し、翌朝になると、不思議にも新郎の姿が見えない。狹い床穴のことであるから雄は到底逃げることは出來ないのであつて見れば、雄は、容易に雌に食はれてしまふ事が肯づかれるであらう。まさか一夜の間に身肉を雌に食はれてしまふなどとは夢にも思はなかつたであらうに白蟻に於ては、ある時機が來ると女王

蟻は、その他の多數の雄蟻と共に翅を生じて巣の外に飛出してゆく。そしてやがて地上に落ちて來た女王は、自らその翅を脱離するのであるが、そのとき、不思議にもこの女王蟻はいつの間にか一匹の王蟻に伴はれて來るのである。この王蟻がどのやうにして女王蟻の愛をかち得たのであるかに就いては未だ誰も知ることが出來ないでゐる樣であるが、とにかくこの時未だ二つの蟻は交尾をしてゐない。

兩王蟻は相携へてしばらくあちらこちらと徘徊するのであるが、これはいはゆる新婚旅行でなく「戀人同志の散歩」である。女王は未だ受精してゐない處女である。この、雌雄が一緒にゐて而もなほ長い間交尾をしない動物は外にはあまり見られない。やがて、兩蟻は巣を營むために脊中あはせになつて互ひに突張り合ひながら孔を掘るのであるが、最初に掘られた孔が卽ち交尾孔である。

それから、亭主を食ふ昆虫に、螽がある。夏、太陽の照り輝く炎天に高い聲をあげて、二つも三つもの雄がコーラスで鳴唧するのであるが、その頃雌には未だ性欲がないと見えて專ら食べつゞけてゐる。ところが八月終り頃雄が鳴きやむ頃になつて初めて雌に性欲が發動するものと見えて次第に雄に近づいてゆき觸角を以てその情緒を交換するやうになる。

この時雄が高聲に鳴くのは有害であるとみえてもう鳴かない。一體動物は、一度異性に合ふと他の仲間の嫉妬の目標にならぬやうに螢なれば光を消し、鳥なれば聲をおとして低く囀くやうになる。きりぎりすはこの時、口にてその脚や蹠底をなめて、如何にもはにかむやうな樣子をするものであると、昆虫の研究家ファーブル氏は云つてゐる。

さて、雄雌相會ふた初日は單に觸角をふれ合はせてお互ひの情緒を交換するばかり、別れて各々欲するところに眠る。その翌日も、單に觸角をふれ合はせる位の處で雄は、決して火の燃える樣な情緒を示さないものである。ところがその後數日の後、雄が、雌の下に橫はつて、雌が雄の肉を食うてゐるのを發見するのである。雄は、地上に打倒されて震へながら抵抗しやうとしてゐるのであるがかなはない。雌は長い産卵管を立て、腿節を高く突張り、いかにも優勝者のやうな姿勢をとつてゐる。何と悲慘な狀態でないか。

「戀愛は死よりも強し」の歐諺は昆虫の世界に於てよくあてはまるのを見るのである。

（「虫界の驚異」より）

# 萬國排酒大會に於て發言時間を横取す

久布白落實

明くれば月曜日である。朝食前から役員會は開かれてゐる。夜から降り續いた雪は掃き清めた道にも猶ほ降りつゞいてゐる。自分は話の用意は略出來たが心の用意が不充分と思ひ、まづ林女史に出席を乞ひ自分は獨り力を祈つた。

我が國の二つの禁酒團體を恥かしめぬやう、又世界に於て藝者がガールとしての外殆んど知られざる日本の幾千萬の婦人の寃をそゝぎ、將來に於て太平洋の彼岸に國民禁酒の旗を翻して萬國排酒の大勢に一つの力を添へんがため、力を籠めて準備した。

十一時が打つた。自分は例の公娼全廢の小袋（婦人矯風會の十錢獻金袋）を全部貼つて大巻物にした物と同乘して會場へ急いだ。林女史も自分も和服、いつもの羽織袴であつた。巻物を抱へて壇上の林女史の傍に座につき、すぐ昨日の約束によつて（發言の）時を求めた。當日の司會者はカナダ矯風會の會頭ライト女史であつた。十分、二十分ゝと時は遠慮なく進む。再びノートを書いて渡した。つひに一人の委員が來て、

「一體誰が約束をしたのか、時は五分しかない、それでもよいか」

とのことだ。自分もムカ／＼として來たが、簡單に「よろしい」と答へて待つてゐた。十二時二十分前になつた。會頭はやつと日本のメセジと云つて私たち二人の名を呼び上げた。

林女史はツト進んで前へ立たれた。自分は左手から、例の大巻物をかゝへて出て行つた。そして講壇の端から正面まで擴げてしまつた。林女史が一言あいさつされた後、すぐ引きうけて話した。その大要は次の通りだつた。

「自分らは日本から來た。二つの禁酒團體を代表してゐる。然し自分は、日本婦人として二十萬の不幸な婦人を擔いでゐる。昨今英譯の「キモノ」を讀んで、更にその重荷が増して來た。然して、米國のエバントストンまで來て、日本國民の眞相を科學的に研究する狀態をみて更に重荷を感じて來た。費府大會に出席した時は、殆んど重荷の下に倒れんばかりであつた。

然しこゝで、不思議な現象をみた。それは、イギリスもアメリカも、カナダもみなその國民の中の罪のために苦しみ、且つ泣いてゐる事實である。自分は初めて、世の中はキリストを先頭としてすべて善を求め、正しきを慕ふ人々は苦しむといふ事が事實として解せられた。又、僅かにキリスト敎化せんとしてゐるわが國と、殆んど敎化せられたりと思ふ英米の諸國とが、初めて同情と友愛の思ひを以て手を握ることが出來た。日本婦人は實に、母としても、妻としても、これ程忠實な婦人はすくない……」

と云ひかけた時左手の方から靜かな足どりでゴルドン女史が止めに見えた。この時自分は、日本の三千五百萬の婦人のために、一言でも世界の人たちに寃をそゝがなければ、禁酒も何もあつたものでない、といふ氣が一杯であつたので、クルリと向き直つて司會者及び委員に向つて、

「委員諸君、日本のために時間を下さい日本のために少しの時も作られぬといふのは正當ではありますまい！」

と云つた。すると、會衆の多くがアッと立ち上つて、

「時を與へよ、"Give her time!"」

と云ふ叫びが起つた。司會者はつひに

「何分間？」

と問ふに答へて、一同は、

「五分間ツ！」

それで、更に五分間を貰つて、自分は男女道德の標準を一にする運動、及びわが國の廓淸運動を一言し、最後にこれらを成就するために今後は國民禁酒を標語として新しく戰はん、願はくは櫻花香る極東の一島國が、神と人とに祝福せられて永遠に輝き得んために祈られたし。

と云つて結んだ。

この最中、一度會衆がドッと笑つたので自分は不思議に思つたが、あとで聞けば、自分の話が未だ半分にもならぬとき一度司會者が止めに出かけたさうだ。その時林女史は、今とめられては大變と、覺えず驅せて司會者のうしろに廻はり、

「どうぞ一分間待つて下さい！」

と繰返しながら、一心に司會者を抱きとめて居られたさうだ。會衆の笑つたのはその時であるらしい。

會の後、自分らは許しをえて例の一千萬兒童禁酒敎育の櫻花色の印刷物を來會者一同に散らした。異狀の光景に打たれた人々は和服姿の二人を見て、

「どちらが話をして、どちらが司會者をつかまへてゐた方か？」

見當がつかぬらしく尋ねてゐた。

（「女は歩く」より）

# 雪によせる熱情

林芙美子

茫漠たる吹雪の野に
私は只一羽の荒鷲となつて
ゐつぱいの羽根
ゐつぱいの魂
せいゐつぱいの情熱を擴げて
ひと打ち！
ピユンと私は野を越へやう——。

キリキリ　キリキリ
美しい雪の砲丸
私は眞赤な帽子をかぶつて
ゐつぱいの兩手
ゐつぱいの心臓
せいゐつぱいの瞳を開いて

ころころ私は雪にまみれやう
あゝあの眞蒼い雪！
雪の上からのし上がる斷雲
あゝもれもれと上がる私の顔のスフインクス
野も山も雪も家も呑んでしまはう

雪の上のスフインクスは
涙をふりちぎつて大空に息した
ゐつぱいの口
ゐつぱいの息
せいゐつぱいの胸をゆする

ランマンと咲いた地球の上に
ランマンと飛ぶ雪の砲丸
さあゐつぱいの力だ！
ゐつぱいに足をふまへて
私はせいゐつぱいに弓を張らう！

# 蜜柑が届いた日

赤松月船

上を巻いたこもを解くと
石油箱はまた
棕梠の緒で叮嚀にしばつてあつた。
それをほどくのに手間がとれた。
窓に並んだ小さい顔が
それ〳〵の表情でもどかしがつた。
一番大きいのが到頭「きつちまいなさいよ、お父さん。」

金槌の尻でこぢると
ぱつくり箱のふたがはね上つた。
一杯詰まつた蜜柑が
みんなの顔に明るい平手打ちをくはすと
一番小さいのまでバンザイをした。



一つ一つ取り出しながら「そーら」
とかけ聲をかけるわたし。
「そーら」
と同じやうにかけ聲をかけて受取る手。
窓の手、小さい手、
ずつと小さい手もあつた。
「まあ、こんなのが」
目を瞠るその顔に、その頬に、
翳したその蜜柑のいろがほんのり映る、
「今度はあたちにも大きいのを」
うろたへていふ聲！

さて、
疊の上に積んだ蜜柑の山をとりまき
てんでに口を動かす子供達、忙しげなその様子を眺めなが
らわたしは遠い伊豫の國をおもひ、
年老いたおばあさんをおもひ、
瀬戸内海を見下すだんだん畑をおもひ、
鈴なりになつた蜜柑の樹をおもひ、

やもめの姉と二人、
荷を運んで行つた野中の驛をおもひ、
孫達に喰べさせたいといふ、それだけのひたすらなおばあさんの心に涙を感じた。
外には秋晴の陽があたたかく美しかつた。

# 母の歌ふ

伊福部敬子

春とほい街を風に追はれて
建物から建物へと
仕事を求める母に隨き歩いた彼等
冷たい夜の床に、母の暖かみを欲しがつてゐた彼等
彼等の上に、どんな夢が今舞ふのであらう。
背けたとぼしい灯の下で
幸福な子等のお伽のための晴れやかな物語りを綴りつゝ

ある母
肺尖のあたりに迫る寒さを
ゆりあげゆすりあげつゝ。

子等よ
母のおろかしきこの營みが
まこと御身等を愛する道であらうか。
「このやうな苦しみをお身等のためにした」
と、子等に負ひ目をおはする心はない
「このやうな苦しみをして來てよかつたらうか」
母は、子等よ、お身とお身等の運命とにとひたい。

眠入れる子等の細き眉に
微かにも殘る愛ひよ
あゝ、八街に風あらく春とほき夜更よ。

ユナイテッド・アーチスツ會社
メトロ・ゴールドウイン・メーヤー映畫
クラーレンス・ブラウン氏作品

# 肉體と惡魔

全九巻



原作　佛國文豪ヘルマン・ズーデルマンの
「不滅の過去」
脚色　ベンジャミン・グレーザー氏
監督　クラーレンス・ブラウン氏
撮影　ウイリアム・ダニール氏

## —配役—

レオ・フォン・ハルデン……ジョン・ギルバート氏
フエリシタス……グレタガルボ嬢
アルリヒ・フォン・エルツ……ラース・ハンセン氏
ヘルザ……バーバラ・ケント嬢
レオの母……ユーヂエニー・ベツセラー夫人
フォン・ラーデン伯……マーク・マクダーモット氏

## —梗概—

休暇をもらつて、窮屈な軍隊生活から解放されたレオとアルリツヒの二人は、久しぶりに故郷……やさしい母親がレオを待ち、純良な妹がアルリツヒを待つてゐる、なつかしいふるさとへ歸らうと、汽車に乗つた。その汽車が故郷の停車場に着いた時、ゆくりなくもレオの眼を牽いた明眸皓齒の佳人がある。レオの心は怪しく躍つたが、名も名乗らねば聞きもせず、あはたゞしく二人は袂を別つた。

そのゆきずりの果敢なさがレオの心にどんな深い未練を殘した事か。

その夜開かれた舞踏會で、レオは再び女に巡り逢つた。そして親しく語り合ひ、踊つたが、思へばそれが戀の始めなじみの始め……二人

の心は激しく燃え立つた。すると或る夜、女に夫がある事が分つた。レオは一方ならず驚いたが、今は如何ともする能はず、夫の挑むに任せて決闘した。その決闘に、夫は敢えない最後を遂げる。

レオは此の事件のために流竄せられて、アフリカに勤務する事になつた。三年の月日が流れた日の事、一通の手紙は、レオの招還を報じてくれた。歸心矢の如く、レオは駒の足掻きに、五百重の汐路に戀せし女の幻想を描いて故郷へ歸つた。

三年振りに歸つた故郷の空！　そこにはレオを喜ばせる何物も待つてはゐなかつた。契りし女は今は親友アルリツヒの妻となつて、冷たい眼ざし、凍る吐息に、よそ〳〵しくレオを迎へたのである。レオは友だち夫婦の幸福のために己れの戀心を殺して退ぞかうと決心した。しかし、再び昔の戀人を迎へた女の情火は燃えた。彼女はレオを挑まうとする。

女はしかし、アルリツヒの温情を忘れたのではなかつた。たゞ、レオを失ひたくなかつたのである。それで、アルリツヒが女の心を知つた時、彼はレオに決闘を宣言するより外はなかつた。

決闘！　レオとアルリツヒは手ん手に銃を手にして立ち上つた。が互ひの胸には睦まじかりし昔の姿が蘇つて來た。二人は今更のやうに



抱き合つて一人の女の心を得んとして、我が心を失はうとした愚かさに眼ざめたのであつた。

女の一生は、戀愛の成果を求めて動く巡禮である。これに成功すれば幸福な生涯に入り、破るれば薄命の嘆に一生を泣く、愛慾の二途に迷つたアルリツヒの妻は、己れを破り二人の男を狂はせて深淵に悲しい最期をとげた。

青春の心の痛傷も、時が經てば薄らぐ。レオはその次の春、自分にも人生の春が巡つて來た事を知つた。彼はアルリツヒの妹と結婚すべき希望樂しい自分自身を見出したのである。（終り）

# 豫算の話

野田豊



「ブルジョア階級の共同事務を管理することゝ、プロレタリアを抑壓すること、かうした二つの國家機關の作用は、マルクス――エンゲルスに從へば、資本家社會の發展と共に發展するが、これに伴うて國家及び公共團體の財政上の需要も從つてまた增進し、財政膨脹に伴ふ年々の豫算が政治の中心問題となる。」(マルクス主義講座より)

から云ふわけから、昨今田中反動內閣は豫算の編成に血眼になつて居り、また民政黨もそれに批評を加へて、新稅創設は不可であるとか、或は地租及び營業收益稅を地方に委讓することは公債財源を多くするのと國民の負擔をます〱大きくする事に依つてしか出來ないものだ、とか云つて非難を加へて居る。單に今度の豫算編成のときばかりではない。いつでも議會の中心問題は豫算案であり、またそれに伴ふ諸法律案であつて事實豫算は政治の中心問題となつて居る。そして豫算案を中心として各政黨は離合集散を行ひ、或はまたこれが爲めに內閣も總辭職をする。何故ならば豫算とは、ときの政府の政策を具體的に表現したものであつて各政黨政派の政綱を最も直接的に表現したものであるからだ。そればかりでなく、國民經濟もこの豫算に直接の交渉を持ち、國民生活もこの豫算に依つて支配せられるからだ。云はゞ豫算は現代國家の支柱のやうなものだからである。

だが國家の支柱たる財政の機構は實に複雜で、容易に其の實相を掴むことが出來ない。だから其の複雜の故に、外部からの非難攻撃を比較的らく〱と防禦し、無産階級の目を誤魔化してしまう。而かも、國家のほかに府縣市町村等の自治團體が或る程度の稅權を委ねられてをつて夫々地方豫算を編

成して居るのであるから益々豫算は複雜となつてしまう。然しいくら複雜だからとて無産階級は、之れに目をくらまされてはならない。解剖のメスを下すことに無精であつてはならない。この豫算に依つてプロレタリアの抑壓は實行せられ、ブルジョアの攻撃は行はれ、無産階級の搾取が行はれるのだから、其處で極めて簡單にそして平易に豫算とは何んな化物か」をこゝに一瞥して見やうと思ふ。

□

僕は煙草が好きだ。一日に少くとも敷島二個とバットかエアーシップの二個は煙にして居る。いま原稿を書き乍らも左の手には現にバットを持つて居る樣な始末だから、朝起きれば先づ一本、便所に行つてまた一本、新聞を讀み乍ら一本、新聞社に出勤する途中で一本……なんと云ふ調子でフカす。敷島が一ツ十八錢、エアーシップが十二錢、だから一日の僕の煙草代は先づ少くとも六十錢見當だ。たまにはハバナのシガーも啣へるし、月給日の翌る日には金口のシガレットも吸ふ。だから煙草代は相當にかゝる。だがこの煙草は實に安く出來るのだ。專賣局の御役人は商人と同じやうに「煙草の原價は極秘です」などゝ云つて決して云はないが、何でも十八錢の敷島などは精々一ツ三、四錢もかゝらないらしい。外國煙草だつて三十割乃至四十割の税金がかゝつてから僕等の口にはいるのだから原價は知れて居る。政府はかうして實にいはゆる煙草の專賣を行つて年額一億數千萬圓の金を僕等煙草黨から搾取して居るのだ。

僕等が搾取されるのは單に煙草のみではない。疲れた頭を休める爲めに一杯の酒を飮めば、其の酒代の半分位は税金が含まれて居るのだ。着て居る着物にも税金がかゝつて居ればまた甜める砂糖にも税金がかゝつて居る。

其の他、所得税だとか營業收益税とか地租とか種々の國税があつて税金を取立てられて居る。また國税のほかに府縣税があり、市町村税があつて二重にも三重にもわれ／＼から税金を取立てるからくりとなつて居る。一體かうして國と地方が取立てる我國の税金の總額は一ヶ年にどの位かと云へば昭和二年度豫算に於て見ると、

**國税總額**　八億八千三百二十五萬七千圓

**地方税總額**　六億四千四百十七萬七千圓

合計　十五億二千七百四十三萬四千圓

だ。一戸當りを平均すると國税は七十三圓五十九錢、地方

税は五十三圓六十七錢になる勘定だ。更に國民一人頭に割當てると、國税は十四圓七十八錢、地方税は十圓七十八錢、合計二十五圓五十六錢となる勘定だ。女も子供も老人も毎年是れ丈け税金を收めて居るわけだが、この頭割りは單に税金と云ふ名目をつけて取立たものであるのだから、煙草とか印紙收入とか其他の官業で取立た税金はは入つて居ない。これをも加へたら其の總額はもつとずつと大きなものになる。

□

是れ丈けの大きな金を租税其他の形式で取立てるのに、國家は實に巧みなからくりで徴收する。

其の方法は至極複雜に、大衆を誤魔化す樣な仕組みになつて居るのだが租税に就いてだけ見れば、大別して二つに分けられる。

其の一つは直接税。

其の二つは間接税だ。直接税は所得税、相續税其他の資本家の所得に對する課税としての所有税である。間接税は關税各消費税其他であつて勞働所得に對する課税としての大衆税だ。

夫れでこの勞働者農民の直接負擔する大衆税とブルヂョアの負擔する所有税との割合を我國の租税に就いてしらべて見やう。大藏省が發表した租税一人當りの負擔表で調べると內國税丈けは昭和元年度に於ては

間接税一人當り五圓八十九錢。

直接税六圓四十二錢となつて居る。

だがこれは內國税丈けであつて、實質は煙草税――大衆税たる煙草專賣益金や其他の官業益金や、また關税等は除外されて居るから間接税の頭割りはもつとズツト大きくなる勘定である。之は中央税制丈けだが、地方税制に就て見ても人頭税に等しい戶數割だとか各種の無產階級負擔税が澤山ある。從つて資本家よりもズツト多く無產階級が税金を負擔して居るわけだ。而かもマルクスの云へる樣に『所有税たる直接税も資本家、地主と勞働者農民とが對立せる現在の社會制度の下にあつては、ブルヂョアは勞銀の引下を行ひ、或は小作料の引上を行ふことに依つて又は物價を騰貴せしむる方法に依つて、高率の課税と雖も多くの場合自分達にいゝやうにならしめるものである。だから租税の大部分は殆ど無產階級が負擔してゐると見て宜からう。斯樣なからくりであるから勞働者も農民も、また無產婦人も税制整理と其の根本的立前とには

無關心であつてはならないのである。

□

國家及び地方自治體はブルヂョア階級の共同事務を管理する爲めに要する費用を捻出する爲めに、租税を取立てるのだがこれだけでは其の費用を賄つて行くことが出來ない。其處で種々の名目で收入の道を講じて居る。

例へば官有財産からは入つて來る收入だとか各種の免許及手數料だとか、罰金、徴收金だとか、官有物の拂下代金だとか種々澤山ある。其の中で租税に次いで最も重要性を有つて居り、また其の金額の多いのは公債だ。公債とは即ち國家や地方自治體が收入と支出との辻褄を合はせる爲めに遣ふ借金證文である。我々の家庭でも月末の支拂に差支へたり、或は子供が出來たり、臨時に支出を要することが起つたときには、借金で遣り繰つて置く。是れと同樣に國家が戰爭を始めて金が入用になつたり、或はまた土木事業其他の仕事を遣る爲めに金が必要なときが起つて來る。さうしたときに國家が金を有つて居る資本家から借りる借用證文が公債であり、地方自治團體が發行するものが地方債だ。

かうした目的の爲めに我國の政府が發行して居る公債は、本年度は一億五千萬圓だ。明年度は二億圓にも上らう。また地方債は一億數千萬圓に上つて居る。然かも我國は毎年發行して居るから其の公債總額はベラボーな巨額に上つて居る。今年の八月末での國債總額は五十七億七千餘萬圓、地方債の總額は昭和二年度末迄に十五億千三百萬圓。合計して七十二億八千萬圓ばかりだ。この利息を假りに平均して年五分乃至六分にしても約四億圓ばかりだ。毎年々々四億圓の借金利子を負擔しなくてならぬのは、云はずと知れた國民の大多數を占める無産階級だ。直接に公債利子が夫れだけ頭にかゝつて來るばかりでなく、公債の發行が金融界——民間經濟を壓迫して間接的には更に無産階級の生活を壓迫して居る。無産階級はまたこの公債發行について無關心でゐてはならない。

□

以上の租税だとか官業及官有財産收入だとか、特許手數料とか、公債金等の收入が國家及地方自治體の歳入となつて居るのだが、この歳入は一體どんな仕事の爲めに使はれるのかまた國家及地方自治體がどんな仕事をする爲めにこれ丈けの金を徴收するのか。今度は歳出の方面を一瞥して見やう。

先づ歳入に關連した事項から見る。前にも記した通り國家

並びに地方自治體が税金を取立てたり、煙草屋を遣るには夫々人も必要だらうしまた工場も必要である。ドロ棒や火の用心の爲めにはサーベルを下げた巡査も必要だし、議員達には歳費を遣らなければならぬ。また河川を修築したり、海外に大公使を派遣したり、電信電話を架けたり、種々の仕事を遣る必要がある。

陸軍大將田中義一君を始め多くの陸海軍々人に月給を遣つたり、支那に兵隊を輸出したり、軍艦も製造せにやならむ。學生達を色盲にする樣な學校敎育も遣らなければならむし、また「物を餘りに考へさせぬ」爲めにはスポーツも奬勵せにやならむ。治安維持法の網を修繕すればサーベルを下げたお巡りさんも殖やさにやならむ。等々々の次第で、國家及地方自治體は人、物、製造、仕事の爲めにどうしても大規模の機關を置く要がある。

其處で中央には外務、內務、大藏、文部、司法、農林、商工、遞信、鐵道の各省の他に夫々お役所が置いてあり、地方にはまた地方で夫々の機關が置いてあるのだ。之等の機關を運轉したり或はかうした機關を設置する爲めに費用が澤山かゝる。其の費用を賄ふ爲めにさきに記した樣な税金を徵收したり或は公債を發行したりするのである。

だが現代の國家機構がブルヂョア階級の共同事務を管理するものである限り、之等の諸經費は公平に使はれるものでない。税金取立ての場合と同樣に不公正であつて、國家産業保護——産業立國等の名の下に大資本家保護の費用が支出されて居る。其の反對にプロレタリア抑壓の爲めに各種の名目の下に費用が支出されて居る。だから無産階級は歳入の場合と同樣否寧ろ重點をより多くこの歳出の方に置いて其の內容を檢討する必要がある。決して無關心であつてはならない。

□

國家及地方自治體が其の事務を管理する爲めに上に述べた樣に税金を取立てたり、或は借金をしたりする一方には種々の仕事に要する經費を支拂ふ。それが爲めに國は國として地方は地方として丁度我等の臺所の樣に遣り繰りを行ふ。平たく云へば國家並に地方團體の其の臺所經濟を財政と云ふのだ。

そして每年々々國家及地方自治體は年度始めに其の一ケ年間には入つて來る收入と其の一ケ年間に要する支拂とを決める。其の一ケ年間の收入支出を極めたものが豫算であつて、其の歳入——一ケ年間には入る收入の見積りを歳入豫算と云

ひ、其の歳出――一ヶ年間に支出する見積りを歳出豫算と云ふのだ。

それで一體我國の豫算はどの位かと云へば本年度の實行豫算總額は歳入歳出共十七億九百十二萬六千二百四十九圓である。明年度は過般の豫算閣議に提出されたものが十七億三千二百萬圓ばかりだ。豫算とはまあざつと以上に述べた様なものである。

## 笑話

### やめたサ

「君すまないが一本貰ふぜ」
「なんだ、煙草をやめたつてぢやないか」
「うん、やめたはやめたサ、先づ、買ふ事からやめたのさ」

### 達見

女嫌ひ「男女同權だなんて愚の骨頂だ、女の中で美しくなくていゝから悧巧でありたいと思つてる女なんてないんだから」
女「それもみんな男には馬鹿が多くて、盲目がほんの少しだからですよ」

### 女の相手

夫「あゝ、男は結婚する何て馬鹿だ」
妻「全くさうよ、だけど、女は困るわね。結婚の相手は男しかないんですもの」

### 結婚

「結婚生活は如何です」
「えゝ、さうねえ、二度とする氣にはなれませんわ」

### 仕へる

「私の兄は一人の主人に二十年も仕へましたよ」
「ぢや私の兄はもつと上手ね、姉は來週銀婚式をあげますのよ」

### 消毒

「この家はお化けが出るつてほんとですか」
「いゝえ、そんな筈はないでせう、もう、よつく消毒してありますから」

# 日本の産業組合に就て

千石興太郎

我國産業組合に就て四項目に分ちて御話をいたします。

## 一　産業組合の本質

産業組合とは明治三十三年三月六日に發布せられ同年九月一日より實施せられたる産業組合法により組合員の産業及び經濟の發達を圖るがために組織せられた團體で左の特質を有してをる。

イ、産業組合は相互協同の團體なること。

この相互なる觀念こそ産業組合の總てに一貫せる原則であつて、組合員をのみ相手にして仕事を經營して行くところに組合の重點が置かれてあるのである。(但し信用組合及利用組合には例外の規定あり)

ロ、出資に對する配當に制限があること。

産業組合は出資の團體である。つまり組合員は一人一口以上の出資をする必要があつて、此の點では株式會社と異るところは無いが、その出資に配當の制限がある點が大に異る點である。即ち組合員は常に此の機關を利用することにより日常相當の利便を受けてゐるのであるからこれ以上出資に對して配當するの必要はないので、只だ出資に對する金利の意味に於て六分特別の場合には一割迄の配當を認めてゐるのである。

ハ、組合員の利用高に應じて特別配當を爲すこと。

株式會社では、その純益を持株に應じて株主に配當する即ち斯る株主配當は現在資本主義社會に於て正當なりとしてゐる。これに反し、産業組合は、すべて組合員の利用高に應じて組合の剰餘金をその組合員に割戻すのである。

ニ、産業組合は公開的な團體であること。

株式會社は一定の資本額が定まつて居るので一般の人がいつでも其の株主になることが出來ぬ、即ち公開的でなく閉鎖的である、即ち産業組合は總出資額を限定してゐない、常時組合員の加入を阻まない。であるから常に總出資額が動くのである。これ公開的と稱する所以である。

ホ、議決權が平等なること。

一人一票主義は世界の産業組合共通の法則である、如何に出資口數を持つ者と雖も議決權は一票である。

ヘ、出資に制限あること。

一人に多額の出資を許すと一人一票であつてもそこに不平等の起る嫌があるし、又さなくとも若しその人が組合を中途退脱したとなれば、組合の基礎に重大な結果を及ぼす恐れがある、依て一人三十口乃至五十口までと制限してある。

ト、任意的團體なること。

農會などのやうに強制的に加入せしむる事は出來ぬ、凡て自由意思によるものである。

要するに産業組合は一般民衆の爲の機關であり、社會的正義に基礎を置いた團體である。株式會社などの營利主義的個人主義に對し、常に非營利主義と人格尊重主義相互協同主義一言にして云へば産業組合主義を發揮してゐる團體である。

## 二 産業組合の事業

産業組合とは總括的な名稱であつて、左の四種類があり、各々特殊の仕事を行つてゐる。

信用組合、(金融事業を行ふ組合) 販賣組合 (共同販賣又は製造して販賣する事業を行ふ組合) 購買組合 (共同購買の事業又は製造、生産の商業を行ひ得る組合) 利用組合 (諸般の設備を利用する組合)

更に各種組合の聯合會があるのである。

## 三 産業組合運動の必要

現在の資本主義經濟組織には二つの缺陷がある。

イ、現在の資本主義經濟組織は、一般民衆が利用出來ぬこと。

ロ、たとへ利用しても自己の福利を增進することが出來ぬこと。

吾國現在の社會狀態では、國民の大部分は以上二項目の缺陷を滿喫してをる人たちである。故に自分の利用出來ぬ又は

利用しても福利を增進出來ぬものは、眞に自己の爲めに自ら計るところがなければならぬ。玆に新らしい經濟制度の必要があり、相互協同の制度による新經濟組織卽ち產業組合主義の經濟組織が生れ出ることになつたのである。從つて產業組合運動の必要またこゝに生ずるのである。

### 四　產業組合の狀態

現今の我が產業組合は數に於て非常に多い。近來產業組合の振興刷新運動が行はれ爾來解散や合併などで組合數は少しく減少は來したが、組合員數に於て增加してゐるのは寧ろ喜ばしい傾向と云はなければならぬ。然し組合自體の內容に於て產業組合主義が十分に徹底せぬことと及び產業組合が徒らに營利會社化して剩餘金第一主義に傾かんとしてゐることは我が產業組合の大なる缺陷である。もし產業組合が資本主義的營利會社の如くなれば、それは明かに組合の墮落であつて組合の滅亡を來すものである。

すべての產業組合なるものは組合員の日常經濟生活の上に利便を與ふべきものであるから、利益金の多い組合必ずしも優良とは云ひ得ない。常に組合員の產業及經濟の發達を助長して組合員の生活上の福祉を增進することによつてのみ組合の良否を判斷すべきである。

要するに、吾國產業組合の將來は產業組合主義を其の事業の上に徹底せしめ組合の組合である聯合會の活動を促進して全國的に產業組合の一大聯合運動が出來るや否やによつて決せられるのである。

## 消費組合（購買組合も同じ）の解說

（これは婦人消費組合協會九月例會のときの講演の概略筆記です）

### 消費組合とは何か

われ〳〵の生活に必要な消費物資を仕入れて組合に入つてゐる人々に賣る組織です。從つて消費組合は、直接買ひに行つたり配達が出來たりする範圍に於て組合員を集め、地域的にあちらにも、こちらにも、作られるべきものであります。

（組合員といふのは、定められた額に依つて、五圓なり、拾圓なり、の出資をして組合の經營を助けるものです。）

### 何故消費組合が必要か

われ〳〵の日常の消費生活を合理的に充たしてゆかうと希ふならば、今日のやうに何一つ買求めるにも多少づつ商人に搾り取られて不當な値段で買はされてゐる事に堪えられなく

たるからです。われ／＼が生きてゆく上に、米が必要、砂糖が必要、着物が必要、讀むべき書物が必要。ところが今日、それらの必要品を賣る店はみんな、徹底的な營利本位の商人で成べく多く賣つて多く儲けなければならないからこそ、お客の要求する處にうまく投じたいと苦心しますけれど、その根本は常に、出來るだけ生産費を安上りにして高く賣つて、その間のサヤをせしめやう、と、儲けを多くすることにのみ苦心してゐるのであります。

消費組合はこの營利本位の商業組織に反對するものです。消費組合が仕入れを行ふのも、消費物資を賣るのも、全然儲けるためでありません。たゞ／＼組合員の必要を成べく安く而もいゝ質にて充たすためです。では、

## 消費組合は原價で安賣りするか

消費組合は原則として市價主義（町で賣つてゐる値段と同程度）をとつてゐます。ですから、仕入れたときの原價と賣り値の間には大分ヒラキがあります。普通には其が所謂純益金で商人の儲けになる分ですが、消費組合がわざと市價主義をとつて剰餘金（この場合には純益金といはないのです）を出しておくのは、一、組合の仕事をます／＼大きく有利にしてゆくために必要な資金として積立てるため、二、萬一缺損した場合に、すぐに組合員に迷惑をかけないですむ様に準備するためです。

普通に成績のいゝ消費組合では、剰餘金の半分を組合の財産に積立てゝおいてあとの半分を、組合員の買上げ高に應じて配當することにしてゐます。この場合に現金で分配してしまはないで、各組合員の出資金として組合に積立てゝおいて貰ふのもあります。つまり、どこで買つても殆んど同じ値段で買ふ以上は、個人の商店に儲けさせてしまつたのではそれきりになつてしまふものが、組合から買へば、組合に損失がない限り（多くの場合缺損なし）配當金として剰餘金の割戻しをうけられる。或ひは、組合に共同積立金をどん／＼殖やして行つて、ます／＼組合の仕入れを有利にし、又、その金子を割いて、組合員に必要ないろ／＼な催しをすることも出來る。殊に消費組合の扱ひ品が臺所むきの日用品である限りその顧客は主婦であるのですから、主婦及び子供の生活をよくしてゆくために、この組合の積立金を有效に利用することは、一方、家庭一つにとぢこもり勝ちな家庭婦人消費組合を通じて團體的、社會的な空氣にふれる機會をあたへるものでありますから、全ての主婦がどの婦人會にも加らないとしても、消費組合にだけは入つてゆくべきであります。成べく組合からものを買ふやうにしてゆきたいものであります。


女の審美能力
鏡の前で裸になつて手足を動かしてみて自分の持つ宝玉にも優る肉体美にうたれるがよい。
長過ぎる胴体にも短い足にも黒い肌の色にもそれはそれでみんなの美を蓄へてゐる。それが味得出来たら偉いもんだ。
女には浅い美は解るが深いコクのある美となると解らない。これはどうしても東洋人のやうだ。イカンながら本当のやうだ。



# 思ふまゝ

榎本八十子

一年の半分を病氣で暮してゐる自分も、去年の秋は一寸氣分の良い日が續いた。その爲に、氣持は彈み切つて、何でも働いて見度い程だつたので、K新聞の主催で開かれたS夫人の洋服講習會の助手として二日許り出ていつた。二日とも雨が降つて寒い日だつた。

講習生は六十人S夫人を中心に助手は自分と他のミセス四人都合六人の指導者、會の內容は、洋服の「裏とりかへ」といふ極めて重寶なプロ的なものであつたに關はらず、講習生の少いことはさびしいことだつた。

ぱつとしたさして實用的でもない手藝會の時には、もつと／＼二倍も三倍もの講習生があると聞いていさゝか恐縮した次第だつたが、まあ、一人でもいい、學生の、良人の表面は何でもない立派な服の案外ぼろぼろに破けた裏が、如何に容易く完全に取り換へられ得るかといふことを覺へて貰ひませうと、しんみりした氣持で一人一人に手を取つて敎へて上げることの出來たのはいいことだ。

中には妙な人もあつた。講習そのものが目的ではなくて遊び半分、有名なS夫人に接しる爲に仕事の邪魔に來たやうな人も見受けた。そしてその人の云ふことに、

「今度の講習の先生方は、皆さんお風采がお地味でゐらつしやいますこと」そう云つて特に、メリンスの服を着てゐる自分に聞へよがしの眼を呉れて、連れの娘さんと顏見合せた四十がらみのおしやれさん。

「先生方、之をお習ひになるに何年位掛ります」

と質問する人。まさか一晩で習ひましたとも云へませんわねえとM夫人が笑ふ。

講習そのものが眞面目なに對して、講師の品評をしてゐる態度の不快さはすぐ心を打つ。

他の講師は、三日間とも裾模様を着て來たとか、祿に知りもしないでいい加減な事を敎へて吳れたとか、露骨に自分達に話す彼等の氣持にどういふ根が張られてゐるのか、思ふだに快よい想像ではない。敎へるものゝ人格の反映は愚にすべきものではないが、敎へられるものも、もつと眞劍に掴むものを選んで貰ひ度い。——と、いささかでも本氣であつた自分は思つてゐた。そして、S式の講習は今年の春にも、この秋にも開かれる筈だつたが、K新聞を取り卷く種々の自尊心の高い手藝家達が、そうそう一人の者許りの講習會を開いては不公平だと騷ぎ立て、醜い自己宣傳のわやわやで、S夫人は遠慮されて了つた。それだけ、一部の民衆婦人は損をしてゐるわけだが、何故お互に、もつと根强い道德的な立場に立つて、多くの人達と手を握り合つて行かないのだらう。こせこせとして、表面的に許り動く人達を、自分は一番怖ろしい人達だと思つてゐる。

×

十一月の婦人運動にも書いてあつたが、どうも本を讀む人が少ない。そんな隙がないといふのだ。家のことに追はれ通しだといふのだ。家の仕事をどんどん追ひかけてゆく勇ましい氣持でなくて、それそれと追ひ詰められてゐるといふ情ない心持で、くよくよ思つてゐるのだ。本の讀み方一つで、そんな馬鹿氣た考へ方も救はれ、どうして輕る輕ると暮してゆかれるかゞ解つて來る筈なのだがと自分は思つてゐる。本を讀んでも、たゞほんの常識的に見るだけで、生活内に意識してゆかないのも困りものだ。自分も、二人の子供の母、老ひた姑もある上に、病弱と戰ひつゝ幾つもの仕事をしなければならない身なのだが、机に向つて本を見ることなどは思ひもよらない。お魚を燒く間、或はちよつと立つた序、座つた序、新聞などは暗い便所の中に持ち込む不便さもある。そして貪ぼり讀むものは多くはないが、氣持の上だけでも新らしくされ、勇氣づけられる。激しい勞働に疲れ切つてぐたぐたになつて一日を吻とするやうな人にまで、そんなことは强い度くもないが、子供を抱へて、ぺちやくちやと、しやべり步るいたり、姑の惡口や嫁のあらや、良人への不平や、果ては我子の惡口までくどくどと訴へたり話し合つたりする隙に、一生懸命に自分を育てゝ吳れる知識を探し度いものだ。

×

すぎ去つた一年をかへりみて、別に悔もなく、悦びもなく、嬉しくもなく、悲しくもなく、誠に味氣ない言葉だが、只一つ眞劍であつたことを感謝する。そして、自分達にとつて大きな仕事であつた家も改築出來たから、眞面目に婦人運動を讀んでゐられる方達がお話に見へるといいと思つてゐる。お互の、一生懸命の生活に就いて話し合ふことは嬉しいものだから、自分は誰方でも遊びに見へたらと思つてゐる。秋ならさつま芋、夏なら西瓜、之から冬は少しの間何もないけど皆好い人許りゐます。病弱と云つても自分のはリユウマチス、傳染しない積りです。

# 女の言ひ分

並木琴

何も、見るのも聞くのも言ふのも讀むのもいやになつて戀人にさへ足どめの手紙を出したら「強度の神經衰弱の由お許しある迄」といつて寄こしたその二三日目、「もう何も見るまい、私の心にしつくりする讀物がみつかる間、そういふものを誰か書いてくれない間、一字ゝ新聞だつてよむまい、勿論かきもすまい」と思つて、隨分澁い――といふよりも暗い面をして、新宿の何丁目かを通りかゝつた或夕方一包十錢とかいた古本の露店を見出したのだつた。

「決して見まい」と思つた文字……私は又足をとめて目をおとした。

と、そこに澤山投げ出された雜誌の中から、婦人公論二冊十錢といふのが目に入つた。そして一冊の方の表紙には「秋季特輯家庭爭議」といふ號題がついてゐるのだつた。

家庭爭議……？

何かしら、から、どん底的な空氣の中から、一つの深い何ものかを求めやうとしてゐた私は、そこに私の求めてるものが隱されてるやうな氣がしたので、早速十錢玉を投じて買ふことにした。

「安いでしよ」私はそう言ひながら、ものずきさうに見る友達に一瞥を與へて、大事さうに子供のやうな好奇心さへ交へてもちかへつた。

頁をめくる中に、私は偶然にも平凡社（私の）の社長下中

氏の名前を見出したのだ。題を見たら「私の言ひ分」といふのである。何だらうと思つたら、「言ひわけ」とよんだのは誤りで「言ひぶん」といふ意味だつた。

つまり、編輯者側からは「妻に對する私の言ひ分」といふ課題だつたらしいけれど、偏狹なことの嫌ひな下中氏は凡ゆる女性に對する云ひ分としてかゝれてあつた。

何しろ、大正十五年十月といふのだから、丁度三年前……その頃と現在の社長としての言ひ分は多少ちがつたかもしれないが、しかし、あの社長にして、そうした問題に對するつまり「言ひ分」に天地の變りはないに違ひないと思つた。そして、一字一句は私の識る社長のまさに言ひ分であるとさへ思つた。

が、私の目はハタと止つた。といふのは、或對照物に對して、私が常に物足りなさと腹立たしさを多分に感じさせられてるその文字であつたからである。次にその文字を轉載すれば、

「男は概して、女に對してやせがまんなもの、自身の地位の安泰ならぬを知らせたくは決して思はぬ、びくびくものでありながらも常に泰然として妻に對したがつてゐる「訴へ得る妻は幸だ。夫には訴へるところがない」この心持は果して私だけの心持であらうか。なべての夫の心の底での呻きではなからうか」と。

だが、世の夫よ、男よ、戀人よ！

どうしてそう強がらなければならないのです。何故、凡てをぶちまけて女性を相談相手にしてはくれないのです。彼女たちは、彼の心をつかむためにやせるのも忘れてゐるだらうものを……

そして、私は思ふ。下中氏が、すべての男の心理を代表して發言されてるのに對して、これは又、なべての女性の――とは云へなくも、尠くとも、精神的にめざめた女性が夫に對して、戀人に對して、その精神的生活を持續さすために舐める底知れぬ惱みの最上なものではなからうか……と。訴ふべき夫必ずしも解決者でなく、戀人又慰安者ではないとどうして云へないだらう……。

今日も、私は或苦境のどん底にある若い妻持者の友人と二人、それも若き失業者の夫を殘して、子供と共に家出した、健氣な人妻の手記を話題として、それらの話を進めたが、彼も亦、明日を憂慮する中にありながら「愛妻と共に

働かう」とは願はないのだ。どうしても、極端に云へば、「飢えても僕の男であることを忘れて働いてはならぬ」といふ暴君的な變にやせ我慢な男の意地を通して、飢えにかへても女と同等であることは恥だと思つてゐたいのである。

しかし、女に云はすれば「だつて二人共飢え死にするじやないの」といふのだけれど。そうして、從來の女のやうに働くといふことをそんなに苦痛に思はないどころか、恥ぢとは勿論思つてないものを。

で、家出した若い人妻の果斷な行爲について私は「一瞬間を生活してゆくより他にないプロレタリヤの生活に於て當り前の行爲に違ひない」と批判したのに對して、男の立場は尙、女の淺薄さを詰らうといふのだつた。

然し、この頃のものゝわかつたコンミユニストたちは、そんな囚はれた男の片意地で滿足してはゐない樣だ。尠くともそんな男も隨分あるやうに思ふ。何もわざ〳〵凡ての女が男の仕事場に出かけなくともいゝけれど、男がいつ迄も時代意識を體得してくれないといふことは、女のために甚だ迷惑である。殊にプロレタリヤの女のためには……

改めて、私は「私の言ひ分」でなくて「なべての女の言ひ分」としておく。

さて、都合上下中氏の言ひ分のキーノートを載錄する。

「概して女は、今の社會をより多く呪つてあるべきだ。從つて解放運動のすべての陣營に眞先かけて馳せ參ずべきだ。

女は、いかなる女もみなまづ何よりも解放運動に加擔すべきだ。だのに、だのに。

女の多くは、解放運動をけぎらひする。解放運動及びそれに從ふ男子の群を惡もの扱ひにする、恐れをなし、敵視し、動もすれば裏切りさへしかねまじく見える。これが何より大きな私の現代の女に對する不滿である。

明治維新の當時、筑前の野村望東女が示したやうな姉様ぶりを今の女のすべてに望まうとは思はないけれども、せめては女が、女のすべてが、女自らの社會的地位を明かに見つめて、そして、解放運動途上のこの社會において、苦しみ惱みあえぎ居る男子の群に毛蟲を見るやうな眼を向けることをやめて、心の底に同情を湛へてながめて居る位の程度にあつてほしい。」

以上のやうになつてゐる。然し、それは婦人運動の讀者には、勿論問題ではないと思ふ。何故なら、そうした運動家を毛蟲のやうになんぞ思ふものはない筈だから。でもこれは序までに揚げておいた。

## 再び素浪人階級へ!!

開地敏子

浪人脱出記を書いたのが一ケ月前、そしてそれが婦人運動の十一號に活字となつて現れた日、皮肉にも私は、またぞろ浪人階級へ逆戻りをさせられて仕舞つた。

脱出の日から墜落の日までに得たお寶は、就職したのが十月十日で、退職したのが十月二十八日、合計十八日間だと云ふので、月俸六十圓也を日割勘定にして、大枚三十六圓也を頂戴に及びお拂ひ箱になつた譯であるが、お拂ひ箱になるにはなるだけの理由がなくちやならぬ。

前世で人樣にイヽンネンをつけた輪廻か、解雇理由が甚だ鼻もちならぬ理由で、實は國家に對して損害賠償の請求訴訟を提起しなければならぬ樣な筋合なのである。

近來刑法學上、無實の容疑者を誤判によつて服罪せしめた場合、もしそれが無實であることが明白になつたトキは國家は共者に對して、精神上物質上よつて蒙つたところの損害を賠償する、國家責任賠償法とかが時折問題になり、いろいろと研究されてゐる樣であるが具體案とはなつてゐないらしい。

人權尊重と云ふ純理論から云へば、無實の者を罪ありと誤判して牢獄の憂き目を見せ、やつぱり調べて見たらお前は無實だつた、以後疑はれる樣なことをするナ、モウよい出てゆけてな調子で、五年十年の牢獄生活を棒引されたんぢや、チト間尺に合ひましねヱだと人事ながらクダが巻き度くなる私の性分、まして私自身がその間尺に合はぬ役を買はされたとしたら、卷舌位ぢやおさまらないのが當り前と獨り合點で靑筋立てゝも仕方がない。

お拂ひ箱になつた曰く因緣を申上なきやならないのだが實はあまりに馬鹿馬鹿しいことでお話にならない。理由は只警察の高等係が、私の勤務先きの某雜誌社へ「警察の者

だが、開地敏子は什う云ふ身元の女だ」と聞きに來ただけの至極簡單なる理由で、私は首をチョン切られて仕舞つたのである。

何故私が高等係に身許を調べられたかと云ふと、御大典間際で恐ろしく神經の尖つてゐる高等係が、私が他の女の人達と違つた恰好をしてゐるとかで、共産主義者ぢやないか？私がいつでもさしてゐるツゲの横櫛（實は安物のセルロイドの櫛）が、或意味をなすものではないか、嘗つて神近市子氏が私の樣な樣子をしてゐられたから、疑ひ度くなつたまでの話で、警察に出頭して三十分も話してゐる間に共産主義者どころか、世を捨た人のぐうたら女だと忽ち疑惑は氷解、大いに握手を交したと云ふ結果になつたのだが納まらぬのは糧道をそんなケチな理由でブツ斷れた私の腹の底である。

何はともあれ一應高等係へ御挨拶にまかり出ずば腹の蟲が納まりはしないのだが、向ふ鉢卷で怒鳴り込むには相手が惡い、仕方がないから鉢卷きの替りに艶然たる微笑で談じ込んだことである。

「貴方達がつまらぬおせつかいを遊すから私は六十圓を棒にふつて失職して仕舞ひましたよ、先方の曰くですね、私の方ぢやブルヂョア相手の雜誌だから、思想の赤い人では甚だ困る、殆めから貴女は多少色がついてゐると思つてゐたが、高等係に睨まれる樣ぢや萬事に都合が惡いから退社して貰ひ度いと云ふのです。だから私が次の仕事を見付けるまで月六十圓也を賠償する責任がありはしませんか、私は赤い思想ぢやないけれど、生活に困ると赤い思想になるかも知れませんからネ」と、理屈を云ふと警察の恐いおぢサマは生意氣な女郎だ、豚箱に暫くほりこんでおけ、なんて仰有るから、實は裏道からやんわり皮肉つたのである。

ところが恐いおぢサンの曰く

「君、僕達は斷じて、君を失職させる樣な眞似をした覺えはないよ、僕達が君の迷惑になる樣なことをいつた爲に君が失職したと云ふのなら、僕は六十圓辨償するサ、そりや君を解雇するのに警察をダシに使つたのサ、斷じて僕達の行動が君を失職させる樣なことをせぬことを公言する」と他因說を主張されるのである。

斯う話がチグハグになつちや、一體誰が私を失職させた

のだ。古い流行語で云ふならば全くクロスワードだ。

「ヘエ妙ですね、編輯長が確に、現代人は多少思想に色づいてゐるのが普通だが、何分にも社長が警察の方が見えたのではと、心配しますから」と言ふのが私の解雇理由であつた、と私は重ねて押しかへすと、おぢサン曰く、

「ぢや警察が身元保證をする證明書をかくからモ一度談判して、雜誌社に屆つて貰ふ樣にしたら什うだ」となかなか親切である。そこで私の曰く、

「私と云ふ人間を見拔くことの出來ない樣な人の許へオメオメ戻る樣な腰拔ぢや私はないつもり、また今更解雇理由奈邊にありやなどと野暮な詮索はいたしますまい」

×

併し私はつらつら感じたことがある。嘗て私はこれに似た經驗をもつてゐると云ふのは、私が或雜誌の編輯長をしてゐた頃、一人の女の友人がヒステリツクから、私の讒訴を警察にしたことがあつた、そのとき警察は私を呼び出しはしなかつたが、私の弟の許へ私の思想私の素行に就いて取調べ度いことがあるから出頭しろと云ふことをいつて行つたのである。すると私の弟を雇用してゐた寫眞屋の主人が「君の姉サンは萬引でもしたのぢやないか、警察から呼出しを食ふ樣な者は使ふことが出來ない」と可哀想にたつたそれだけの理由で弟は解雇され、まつ蒼な顏をして私の所へ飛んで來たことがある。

そのトキ私は寫眞屋の主人に對してフンガイするよりも寧ろ其無智が哀れに思はれた。警察から呼び出しを食へば何か惡いことをした樣に誤解する無智な一般民衆、雜誌經營者や文筆勞働者は年百年中警察と交渉があるのに、と笑つたことであるが、これなどは一體誰の罪であらうか？

警察のおぢサンは「決して君に迷惑がかゝる樣な眞似はしないことを公言する」と仰有つて下さるのだが、私に尾行され、私のことを勤務先きで調べられた事實も嘘ではないらしい。併しそれは勿論決して惡意の行動ではない、みな國家に對する忠實なる御奉公の發露であり、民衆保護の目的であり、赤化防止の手段であることは千萬承知してゐるが、國家社會の安寧秩序を維持する高等政策には今や改善を要すべき幾多の點がありはしないだらうか？

尨大な何百萬圓とかの思想善導費の使途など大いに考慮

を要する問題である。

此際私は當局に建言したい。司法警察方面への婦人の採用である。私の今度の場合の如き、頭から「警察の者だが」と高壓的に出られるから第三者、殊に無智な警察能力を理解することの出來ぬ者には、いたづらに不安や恐怖心や蔑視を與へるおもしろくない結果を産む、確證を握らないうちは成可く婉曲に婦人特有の優しさ柔らかさなどで「實は女中に雇つて頂き度いので」とか「親類の結婚に關しての聞合せ」といつた様に相手を少しでも傷つけないで取調べることにすれば、婦人の細かい神經は男子の摑み得ない事實を發見することも出來る樣に私は思ふのである。不良少年少女の保護司などに婦人は採用されてゐるが、それだけちや甚だ範圍は狹い、巡査にも刑事にも裁判官にも辯護士にもはやく婦人登用の道が開かれなければならぬと云ふことを私は今度の體驗でつくづく感じさせられたのである。

斯うした制度の不備が何人の犧牲者をつくり出すであらうか、再び浪人巡禮の途上に、私は女の手に俟つことの多い數々を進言し當局に一考を煩して頂き度いのである。

## 新刊紹介

### ▲英國婦人勞働運動史（定價一圓）

赤松克麿　赤松明子共譯

世界婦人勞働運動に於て最高の發達過程を示してゐる英國の婦人勞働運動の歴史は、我國の婦人問題研究者に取つて、好個の參考資料たる事は云ふ迄もない事であるが、本書はさうした研究家、運動家及一般社會問題に興味を持つ人々の爲めに編まれたもので、原著者はバーバラ・ドレーク女史、譯者はその方面の研究者實際運動家として有名な赤松夫妻で、譯文の懇接平明な點は同種の生硬な譯者に比し群を拔いてゐる。

發行所　東京芝區新櫻田町十九　解放社

### ▲ラッセルの新育學（定價二圓五十錢）

塚　塚　菊　治譯

原著は有名な英吉利の文明批評家バートランド・ラッセルで、その緒言に於て「私は、以下說く所に於て、第一に敎育の目的を考案しやうと思ふ。卽ち、原料としての子供の性質をばあるがまゝに採用して、たゞこれに私が理想とする形の敎育を施したならば生ずるであらうと合理的に期望される種類の個人及び社會がどんなものであるかを考案しようと思ふ」と原著者も云つてゐるやうに、此著は現代敎育の誤解と缺點を指摘する同時に、著者の深い思索的立場から、新しい敎育法を詳說したもので、譯者の序文に依れば原著の書名は「敎育に就いて——殊に初期幼年時代に於ける」と云ふのであるさうだが、著者はその標題の示すやうに、此著に於て特に幼年時代敎育にその力點を置いてゐる。本書は英本國はもとより世界各國語に譯されて、非常に歡迎されゐるものださうで、以つてその內容及價値を知る事が出來るであらう。

發行所　東京牛込　早稻田大學出版部

### ▲人間レニン（定價八十錢）

スターリン・クルプスカヤ著　瓜生信夫譯

レニンの名は單に露西亞大革命の指導者としてばかりでなく、世界歴史に一つの大きな段階を如實に示してくれた點に於て、絕大の興味ある名と云はなければならぬ。

本書は數多いレニン研究の中から、最も人間らしい人間としてのレニンの個性や風格をしみじみとにじみ出るやうに描き出した、その妻であり同時に、同志であり、秘書であるクルプスカヤ女史の「ヴラヂミル・イリイッチに就いて」及その秀れたる同志であるスターリンの「人間レニン」ルナチヤスキーの「レニンと藝術」を特に選んで譯出したもので讀者は此書に依つて英雄化され、偶像化されたレニンの姿ではなく。眞に民衆の中に生き、民衆と共に呼吸してゐる、偉大な凡人としてレニンの姿を文字通りに見る事が出來るであらう。

發行所　東京牛込區鶴卷町四七一　希望閣

# 長詩　松井須磨子〔第一回〕

高群逸枝

## 序

全身の血と
熱を捧げて
君を讃へ
崇めよう

火のやうな
亂舞
煙のやうな
虚無

淺間の噴火口は
君が七尺の
黒髪を待つ

その黒髪を
火に浸し
天をめがけて
うち振れば

忽ち起る
火文字の虹
全地は寂と
靜まり返る

ああその瞬間
君は
薔薇の王であり
火の女神であつた

君は號泣して
地を　はし
心の底から
天を怒つた

君は高わらひして
戀に燃え行き
匍匐して

夢に醉うた

君はレモンの花よ
人の知らない
黄色な道の
傍へに咲く

君はまた鍛篤よ
茨の間の
石の多い山の
中腹に歌ふ

人はたゞ
君が焰と
熱を
知るばかり

君が傲慢と
傍若無人を
知るばかり

天は燃えて
地は蕪き
秋は去つて
冬がくる

こゝに
一人の女の詩人として
全き君を
描いて見よう

そして
全身の血と
熱を捧げて
崇めよう

—

悲しく燃ゆる
淺間山
遠く野末に
眺めては

何故となく
熱い思で
切な涙に
かきくれて

ひとり軒端に
彳む
可憐な娘

瞳は星と瞬き
姿は
野邊の
花のやう

折しも突風が

地平に起り
殘んの日を
吹き沈める

村々には
灯りがつき
町々には
聲がどよむ

このとき
低い堤防の蔭には
たゞ川波の
さわぐ音

二

自然と人生
何故とも知れない
切な思ひが
娘をとらへる

背後には
明るい町
前には
暗らい森

忙しい足音と
靜かな星影
阿鼻叫喚と
菩提樹のある道

われら
いかに生くべきか
このすべての
錯雜したものゝ中

この多角的な
動搖の中
彼女はふかく
思ひに沈む

だが
それらのものは
長く娘を
とらへはしない

彼女はたゞ感じ
たゞ行ふほかはない
それの批評は
批評家がする

三

行け、行け
山越えて
森を通つて
どこへなりと

アラビヤ人が
巨人の城に着いた時
冒險が恐怖と共であり

生が死と一つであつたやうに

行け、行け
山越えて
森を通つて
どこへなりと

夕闇の彼方に聳ゆる
火の山にむかつて
彼女は
かく誓つた

四

明治三十五年
こゝ長野縣松代在の
野中の一つ家の軒を
月が照らす頃

家の中には老ひたる母が
貧苦に窶れてゐる
窓は寒く
灯りは小さい

灯火は壁に映え
物語は悲しい

先祖は代々
眞田家の家臣で
父も維新前まで
仕官してゐたが

王政復古の激しい浪は
信州の片邊りにも押し寄せてきて
徳川幕府の倒壊と共に
主と祿に離れ

浪々の身となつて
江戸に出た

だが江戸の天地は
彼に幸ひしなかつた
士族の商法は
彼に産を失はせた

娘が物心ついた時分
彼女の一家は
野中の一軒屋に
寒い灯りをつけてゐた

白川の瀬音は
野を通つて窓に響き
荒れた灰色の木々は
心に溜息をつかせた

いまや父もなく
窓のみがある
貧しい一家と
灰色の木々とのみが

## 五

麻布飯倉三丁目の
菓子舗鳳月堂の主は
彼女が姉の良人だつた

芳紀まさに十七歳の春淺く
彼女は國を出た
老ひたる母を
あとに殘して

母は云つた
出世しなさい
女の出世とは
いゝお嫁さんになることぢや

いゝ緣があつて
お前が立派なお嫁さんになる日を
母はあけくれ
待つてゐますぞえ

娘はうなづいて、溜息をついて
故鄕をあとに
東京の姉をたよつて
出てきた

姉夫婦は親切だつた
故鄕の老母からの賴みを
心よく受け入れ
彼女の敎育に專念した

髮や形は
都會風にされ
裁縫や家事が
敎へ込まれた

## 六

信州の白い雪で磨かれた
花の顏
若々しい頰
燃ゆるまなざし

都會は彼女を
受けとつた
そして薔薇色の
夢を與へた

おお青春の曙よ
この時娘は
輝く火裏の着物を着
蜜で作つた夢を見

よいところばかり
見物して歩く

何となれば
彼女は

鍍金師だ
金銀の熔爐だ

月は流れに砕け
星は空に飛び
白銀の霧は
あたまの上で破れる

七

わがこゝろ
妬まれて佗びし
すべての物の影と
その夢なき睡りとに

かゝる夜は
わづかひとこと
ひどいわと
書いても見たい

だのに姉さんが
仰有るには
ねえ
行くことになさい

廣い綠色の
野原を通つて
お馬に鈴つけて

八

都會には
見果てぬものが殘り
町々の灯りは
甘美な霧となつて

時計店や
露店を
浮き出させたが

暗らい露路には
寂寞が横はり
溜息をついて
何かを訴へたが

彼女がどうして
姉の言葉に
そむき得よう

母もまた
遠い故鄉で
喜んでゐるときいた

彼女は行つた
お馬にのつて
そのお馬には
鈴つけて

九

十八歳の花嫁
總州木更津の
大きな料理屋の

粋な前垂
しゆすの帶
朝は悄れて門に立ち
夜は疲れて窓口に

太陽は焰々と
かぐはしく昇り
空氣は蜜のやうに
ねばねばしたけれど

燕は何處から
くるのだらうと
彼女は思ふ

## 十

けふも
賑やかな群は
野原へ
出て行く

盃と
三味線をもつて

その中に
おむこさんがゐる
料理屋の
若い亭主が

彼女の耳に
そのおむこさんの
頓狂な聲が
ききわけられる

雲の下で
何かいつてゐる
その聲が

## 十一

灯し火は消えて
部屋は暗い
おおいゝ娘
泣かないで
ねんねお爲し

すると
長いキスが
闇の中から
落ちてくる

もう泣くまい
たとひ宵のおむこさんが
少しばかり
手荒らでも

肥つておくれと
彼はさゝやく
でも反對に
彼女は瘠せる

## 十二

とうとう或日
おむこさんがいつた
お前は
肺病だ
そして姑も
さういつた
客商賣に
肺病やみは
禁物だ
行つてくれ

みじめな、うぶな結婚が
一年間つゞいたあと
ふたゝび綠の野原を
彼女は通つた
子宮をやんで
見すぼらしくなり
靑い靑い
顏になつて
それは
靑白い晩だつた
夕闇が
自分の暗らさに
怯えて泣く晩だつた
彼女はふたゝび
東京の
姉夫婦の家へ
辿りついた

## 十三

夢のやうな
うつゝのやうな
一年間
その一年間は
空ろな跡を殘し
緋牡丹の花のやうに
崩れたが
淡はい印象と
へんな感覺の中で
育つた
瘠せた顏
その顏の持主が
鈴懸樹の下を行けば

霧が降り
日は暮れる

娘よ
泣かぬがいゝ

いゝえ
泣きません
それより
笑つてゐるのです

それはまたなぜ
だつて
それが
道徳だもの

娘は歩いた
坂道を
星の下を

## 十四

行つても
行つても
寂びしい

行つても
行つても
行ききれない

かはいた井戸が
呑口をさがすやうに
うはゞみが
首を酒へもたげるやうに

野心か
名譽心か
はたまた寂寞が
自分の寢床をいやがるからか

すべての
そして諸々の
雜然としたものが
おし寄せてくる

死をもつ生
明るい町
流浪の人
孤獨

何か叫ばずには
ゐられない
しでかさずには
ゐられない

空ろな世界へ
響けよとの號泣でも
地を震はす
高わらひでも

## 十五

人々は
唯物平凡主義を唱へ
誇と衒ひを
そこにもつ

彼等は
形式の齊整を喜んで
激越の感情を忌み
想像力は鈍くて
批評にのみたけ
砂を噛むに似る
敎訓詩をつくる

そしてそれは
すべてのお上品な
お殿様がたのお好みだ

だが
制へられてゐるものは
跳ねあがる

そこには
破綻が伴ひ
非平凡が卷き起る

すべての時代の初めに
ロマンチシズムの波が起り
天を呑み地を吐かうと
泡立つ時

多少の不完全や
偏奇には
かまつてゐられない

波よ揚れ
わが心に

雨よ降れ
わが胸に

## 十六

五年の月日は過ぎた
彼女はもう
二十三歳だ

暗い果てまでも
考へて行つた
その年月は長かつた

だが遠い霧の中に
一點の光の
ちらつくのが
見えた時

溜息をついて
彼女は微笑んだ

時は來た
自分の手に成さるべき或る事業
その事業に入る
第一歩ともいふべきものが
偶然にも彼女の前に
現はれた

それは何であらう
前澤誠助といふ
一個の異性であつた

## 十七

新派俳優の藤澤淺次郎によつて
設立されたもので
東京俳優學校といふものがあつた

前澤誠助は
高等師範に學ぶ傍ら
其の學校で
日本歷史を敎へてゐた

その頃
米國哲學博士で農學士の
荒川重秀が
突如官海を去つて
自ら新演劇を起さんと
社會の一角から
花々しく名乘りを上げた

最初の試みとして
牛込神樂坂上の高等演藝場で
自ら座主となつて
お伽芝居を公演した

前澤はお伽劇にも興味をもつて
かねて巖谷小波に師事してゐたので
荒川の企てに共鳴し
外部から力を添へることになり
演藝場にも出入してゐた

自分の行くべき道について
いろ〳〵に思ひをめぐらしてゐた彼女は
遂に芝居、女優といふものに
目ざめてきた

## 十八

女優といふものは
その頃はまだ誰も
口にしなかつた

舊派の女役者といふものは
早くからあつて
三崎座はその常演座であり

新派では
川上貞奴が
紅一點の面影を

偲ばしめてゐたが

新しい型の
女優といふものはなかつた
さういふ機運には
向いてゐたけれど
名乘り出るものは
一人もなかつた

須磨子は早くも
自ら行くべき道を
これに求めた

そこには火のやうな
衝動と
火のやうな
確信があつた

彼女の申込をうけた
荒川の演劇團では
教育もなく
非常な美人といふでもない
彼女を見て
高をくくつた

けれど誰が
熱意と確信に
動かされずに
ゐることができよう

若い須磨子の願ひは
容れられた
そしてその一派が
お伽芝居を公演した時
彼女もまた舞臺に上つた

## 十九

彼女は
寂しかつた
彼女は
低い教育しか受けてはゐなかつた

田舍の小學校を出たばかりの
彼女だつた
彼女が何かいふと
人々は
その無智をわらふのだつた

無智が何だ
今に見ろ
知識といふものは
第二のものでしかないといふ
證據を見せてやる

彼女のかうした
心もちに對して
理解し同情したものは

前澤だつた

彼は若い
靑年學徒であり
すべての事大主義や
ありふれた考へに
屈しない若者だつた

## 二十

須磨子は
火のやうになつて
本を讀んだ
劇とは何か
舞臺に
効果あらしめ得るもの

劇場とは何か
俳優と
觀客とよりなるもの
俳優とは何か
舞臺で
泣き
笑ふもの
觀客とは何か
板の間や土間で
泣き
笑ふもの

朝は
太陽と共に
起きて本を讀み

夜は
月を友として
窓口に
座つてゐた

## 二十一

あかるい
神樂坂
織るやうな
人の群

歡樂に
醉ふものも
苦痛に
醉ふものも
灯りのかもす
甘やかな
美酒を
滿喫せばやと
かたまり合つて
うろつく

夜店は
光と陰の中
人の目も
一つの商品

白光の
何故とない
哀愁に
泣きすする
夜の街

家々は
四角三角に

屋根を突つ張り
ものそれ自身の中に
灯りを
つけてゐる

二十二

うら若い戀人達は
灯りの町を通つて
田圃へ
行く

一つの岡が
陰をつくつてゐる
しめやかな
早稲田の野

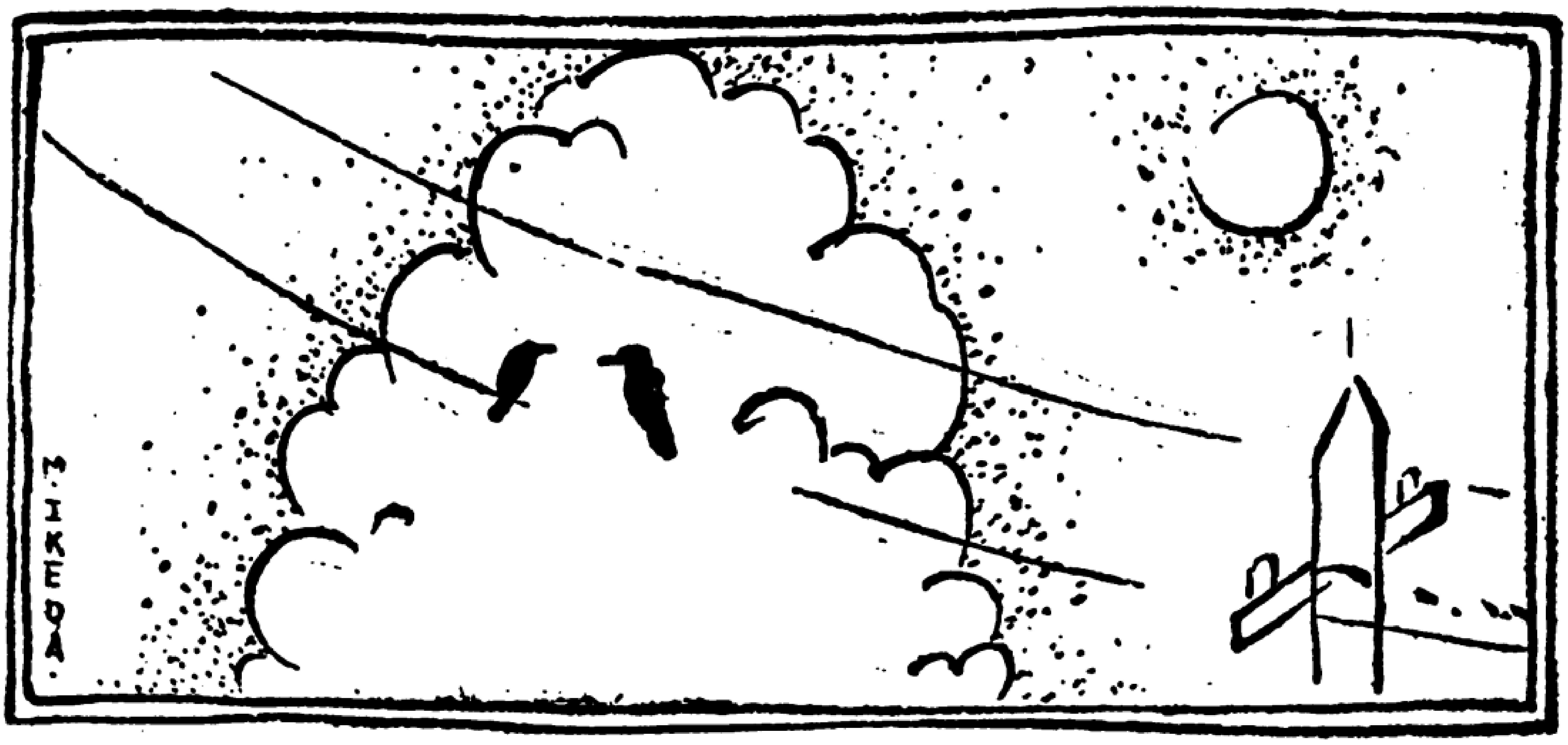
山櫨の
花咲く下で
彼女はきいた
ソフオクリーズを
それといつしよに
もう一つ
きいたものがある

## 作者附記

此の詩はこれからです。ずつと續けて發表することにいたします。わたくしは我田引水でなしに、公平に考へて、新しい文藝は小説よりは、むしろ長詩にあると思ふものです。

早いテンポ、興味と感激に富む大衆的な、それでゐて決して通俗文藝ではなく藝術の香氣の高い、そして必要によつては、思想などを露骨に出しても、それが少しの妨げにならず、却つて全體を引きしめ、深刻にする効果をもつもの、といふやうなことが、新しい文藝に對する一般の希望條件ですが、それは小説には中々むづかしい註文であるに反し、長詩にこそまことに容易な、即ち長詩は、完全にそれらの全部の條件を具へてゐるものであるが故に、わたくしは敢へて新文藝は長詩によつて目ざめるといふことを吹聽するものです。ブルジョア文藝の典型たる小説は、ブルジョア以前の叙事詩を母胎として生れたものであつて、もはやプロレタリアの時代は、再びそこから他の新しい形式へ出發しなければならない歷史的過程にあるのであります。とりわけラヂオなどの發達してきた近代の事情は讀む藝術から聞く藝術、或は歌ふ藝術へ進展しつゝあります。

此の意味において、詩なども、從來のいはゆる詩の領域——より多く讀む詩であり、そのゆゑに文字の美術に墮し、一定の美意識に支配されてゐた境涯を脱し新たな、時としては非美的な世界へ、突進して行く必要があると思ふ。すなはち私は、今年において、ずつとかうした長詩——内容も最初はかうした婦人に關する手近かなものから初めて——を試作しいさゝか世に問うところありたく心がけてゐる次第です。




# 首

池田みわ子

青木は役所を出て、日盛りの埃つぽい道をぼく〳〵と歩いてゐた。

旱天つゞきのために、道は乾ききつて、まるで灰の中を歩く様であつた。靴が動く度に、足許からは白い埃の霧が立ちのぼつた。うすよごれた洋服の肩のまわりや左の小わきに抱えた黒い皮鞄の縫目には、うつすりと埃がたまつてゐた。

彼はじり〳〵と照りつける太陽にうんざりしながら、時々立止つては、額ぎわや首のまわりに、にじみ出る汗をぬぐはなければならなかつた。その度に、彼はフーと口にこもつたあつい息をはき出して、またぼく〳〵と歩きはじめるのであつた。

彼はいま、所長の云ひつけで、A町の一隅にある小さな雜貨商へ、二年分もたまつた税金の督促にゆく途中であつた。

馬糞や藁や、半ば土に埋れたゴム靴などの、所きらはず散亂してゐる、凸凹の通りを幾丁かゆくと、もう町はづれで、そこには老人の齒の様な半ばむしばまれた低い家が、だらしなく幾軒もならんでゐた。こゝらには、納税と稱する國民の義務を

息つてゐる者がザラにあつたのである。

「今日こそは何といつても貰つて歸らなければならぬ。」

彼は一寸立止つて左樣決心すると、その中頃にある一軒の家へ、ずん／＼歩いて行つた。そこが二年分も税金のたまつてゐる家であつた。

彼が店の前に立つと、突然異樣な唸り聲が聞えて、まつくろな蝿の群が一齊に足許から飛び立つた。

「これはひどい。」

思はずつぶやいた時、魚の腸の腐つた樣な臭ひと、黴臭い空氣とが一緒くたになつて、彼の鼻へ突進した。思はず彼は呼吸をとめた。然し、それは實に無駄な事であつた。といふのは、息をころしたおかげで、次の瞬間に、彼は、二倍の臭氣を腹の底まですひ込まねばならなかつたからである。

「ごめん」

彼は足を浮かせる樣にして、外の明るさから取り殘された、薄暗いじめ／＼した店の奥へはいつていつた。

彼は一寸の間、其處に何があるのか、はつきりは、わからなかつた。眼の前にはたゞ白い二つのかたまりが、ぼんやりと動いてゐた。彼は二三度強く眼をとぢた後で、靜かにあたりを見た。眼がなれると、動いてゐた二つのかたまりは、白つぽい着物をきた子供達が、疊の上にねころんで、瓜の樣なものを喰べてゐるのだといふ事がわかつた。

「どうですね、旦那。此頃は貴方がたの方は集りますかね。」

突然、聞きなれたこの家の親父の聲が、彼の背後からきこえて來た。

入口に近い土間には、何かの空箱で作つたらしい汚れたテーブルを前に、これも手作りらしい椅子に腰をおろして、親父が酒をのんでゐた。親父はいくらか醉つてゐるやうであつた。

青木は一寸面喰つたが、役人らしい落着きを見せなければと、つとめて靜かに疊の上に腰をおろした。疊は彼の尻に濕つぽ

くあたつた。
「これはほかのものと違つて、遠慮なしのものでしてね。」
靑木は不氣嫌さうに云つた。あまり親父が親しく話かけて來る事は、彼にとつて決して好ましい事ではなかつた。だが、親父はそんな事には一向平氣で、
「でもこう不景氣ですと、旦那方の御苦勞も仲々容易でないでせうな。」
と磊落にやつて來るのであつた。
「まあさうですな。」
靑木は、何だか云つてならない言葉を、うつかり云つて了つた樣な氣がしたので、急いで口をつぐんだ。
「いやもうこの不景氣ぢや左樣なりますよ。どうしても、一度の處が二度、二度の處が三度、といふ風になりますからな。みんな拂ひたくとも拂ふものがないんでさあ。」
親父はさう云つて、こつぷの底に殘つた酒をぐつとのんだ。
子供達は、何時の間にか部屋の隅へいつて、臆病さうな眼で靑木を代る〴〵ぬすみ見てゐた。
靑木が自分の用件を切り出さうとした時、親父はいつた。
「わしなんぞも、この通りアイヌの樣に鬚を生やしたまんまで、剃りにゆく暇もない程稼いでゐるんですが、それでも食つてゆかれませんからな。貸ときたらまるで取れないし、競爭がはげしいから儲けはないし、安くして數でこなさうとどつさり仕入れて來れば腐るし、といふ具合でしてね。いやはや閉口しましたよ。そこへゆくと旦那方はいゝですな。」
「いや、何といつても商人ですよ。ちよつと景氣がつけばすぐ大きな儲けですから。私達のはほんのもう、定つただけの金ですからね。」
靑木は話につりこまれて冗談でなしにさういつた。そして急に、

「ところでどうです。今度こそどうにかしてもらはなくちやならんのですがね。」

親父はその言葉をじつと聞いてゐたが、如何にも尤もだといふ様に二三度うなづくと、銚子をさかさにして、ありつたけの酒をこつぷについだ。

青木は更に續けていつた。

「幾度もたまつてゐるので實に困つてゐるんです。整理がつきませんからね。まさか、かうして店を開いて居られるのに、何とかならぬ事もないでせう。」

親父は、その言葉を聞くと、酒のために赫らんで脂ののつた顔に、きまり悪るげな笑ひを浮べていつた。

「いや、それが先刻もお話したやうなわけでして、何しろこの不景氣ですからね。店も先程から御覧の通り一人も客はないしへへ、ゝゝゝゝ。どうもすみませんが。」

歯のぬけた親父の口もとが、如何にも彼を、無邪氣で人のいゝ年老にみせた。

親父は、テーブルの上の皺くちやになつた布をとりあげて、それを半ば禿げてゐる頭の上にのせると、顔から太い頸のあたりまでぐるりと拭つた。

土間の隅にある流しもとで、茶碗を洗つてゐたこの家のおかみさんが、前掛で手をふき〱出て來ると、かうした所には珍らしい物靜かな調子でいつた。

「何しろもう、この通り不景氣なものですから、家も喰ひ込みをつゞけてゐましてねえ、本當にいつも〱御面倒をかけてすみませんが、どうかしてもう一月程、のばして頂けませんでせうか。」

青木はさういふおかみさんの姿から、自分の妻が、米屋や家主にとゞこほつた金子の催促をうけて、おど〱しながら云ひわけをしてゐる姿をふと聯想した。そしてあわててその忌はしい聯想を、うちこはさうと努力したが駄目であつた。事實、わづかな俸給とりである彼の家庭も、樂ではなかつたのである。

突然部屋の隅から大きな泣聲が起つた。そこでは子供達が、何かを奪ひ合つてはげしく爭つてゐた。

「誰だ。きかないのは。」

おかみさんは破れた疊の上にあがると、二人の子供を同じ樣に見すえながら云つた。と、その時、靑木の眼の前へ大きな胡瓜の喰ひさしが投げ出された。

「喧嘩するものは家に置かないぞ！」

親父は大きな聲で子供達を怒鳴りつけた。小さい方の子がわア〳〵なきながらおかみさんにしがみついた。

親達は、子供をおどしたりすかしたりしてみたが、少しも子供達の泣き聲は止まなかつた。

獨り取りのこされた樣な氣持ちになつた靑木は、考へるともなしに、自分の生活の事を考へてゐた。

結婚してから滿足な着物一枚買つてやつた事のない妻――

來る年も〳〵穴うめにしかならない賞與をあてにしてゐる妻――

だがその賞與も、所長の御氣嫌次第でふえたり減つたりするのである。

彼は、あの表面如何にも豪放さうで、その癖いやに細く働く所長の眼を思ひ出した。彼はぞつとした瞬間思はず、

「どうですか。これ以上のびると面倒な事になりますが。」

と語氣をつよめて云つた。が、すぐその後から、

「あなたもどうかして、一同分だけでも出して下さる樣に、御都合は出來ませんかねえ。」

と懇願する樣な氣持で言葉をそへた。

然し、幾度云つてみた處で、本當にこの家からは、今がいま、二十とまとまつた金は出さうにも思はれなかつた。

年下の子供に乳房をふくませながら、薄暗い隅の方でゴソ〳〵してゐたおかみさんが、

「それではこれだけですけれど。」

といつて、やがて五圓ばかりの銀貨を、古びた巾着の中から出して、青木の前へ持つてきた。

「これ位の金が何にならう。もつと貰つてゆかなければ。」

と心のうちでは思ひながらも、彼は氣弱く、もう立ち上つてゐた。

「ぢやまた十日あまり後に來ます。」

彼は自分の弱い心に泣き度い程腹を立てながら低い聲でさう云つた。

靴を左の小わきにかゝえると、彼は又、むつとこみあげる樣な臭氣の間を通つて、銀蠅の群を靴の尖で蹴ちらしながら、日盛りの往來へ出た。

暗いところから急に明るみに出た彼は、ふら／＼とめまひがして倒れさうになつた。で、往來に立止ると、眼をつぶつて靜かに呼吸した。

その眼のさきに、妻の青白い顏がぽつかりと浮んだ。

「若しかすると賞與の代りに、首をきられるかも知れない。」

彼は心のなかでさうつぶやいた。

二三度首を横に振るとフーと息をして、彼はまた白い道をぼく／＼と歩いていつた。

――三年・九月十一日――

## 編輯室にて

「明けましてお目出たう存じます。どうぞ今年も相變りませず、何分よろしく。」

どうかこの年も、みなさま、お元氣に御多幸に在すやう祈り上げます。（と、書いてはみたものゝ、實は未だ今日は年末のあわたゞしい十二月十日ですの。）

×

「一年の計は元日にあり」と申します。みなさま、よいお年をお迎へになつて、さてどんな計畫をお立てになりましたか？ 過ぐる年の反省を基として、この新らしい年の歩みを御一緒に始めてまゐりませう。職業婦人社にとつてもよいお正月であり、よい年であるやうに、みんなの顔は希望に輝いて居ります。

×

先日砧村に、西川さん、森園さん、紳さんをおたづねして半日を愉快に遊んで來ました。

東京からわづか二十五分といふのに、まあその空氣のよい事、木の葉の色の美しいこと、何と云つても生々とした心地よさを胸の底まで吸ひ込んで、こんな所に暮していらつしやる方々の幸福さを羨ましく思ひました。それにつけてもこのごみ／＼した都會で、毎日あくせく働いて居られる多くの姉妹方を、せめて一月一回でも、かうした自然のふところに連れ出して上げたいとしみ／＼願はずには居られませんでした。暖かくなつたら、ぜひ郊外にピクニックをして、心おきなくとんだりはねたりしやうではありませんか。

×

たしか啄木の歌だつたかに、

こゝろよく我にはたらく仕事あれ
それをしとげて死なんと思ふ

といふのがありました。この頃しみ／＼この歌を思ひます。職業生活にしても、家庭生活にしても、心から滿足し切つて居る人の何とすくないことでせう……。智識の進歩によるのか、又理想の標準が高くなつたのか存じませんが、如何に多くの人々が、男も女も、等しく同じやうな不滿と惱みを訴へて居るか、と云ふ事を見るにつけ聞くにつけ、人類の社會は進歩してはたして幸福になつてゆくのかどうか疑問を持たずには居られなくなります。然し、かうして求めつゝ、惱みつゝ、それに打勝たうとする努力が湧いて、そこから生き甲斐のある力强い生活が拓けてゆくのですね。

どうか心から喜んで働く事の出來る世の中を私共の力で造り上げてゆくやうに、御一緒につとめやうではありませんか。（文）

今月は、各婦人團體に働いてゐられる方々の忙しい中にも光明あり、力ある生活の斷片的な記錄を頂くことができました。執筆して下さつたみなさんの生活を代表的のものとして、外にも未だ／＼澤山の婦人が、この樣に忙しく、目まぐるしい生活の中から、新しい女の世界を建設してゆくために努力してゐられます。涙なしにはよむことの出來ぬ第一線に立つ婦人たちの闘ひの記錄を讀みしめ／＼てよんで下さい。ほんとうに、人生は闘ひでなくてなんでせう最後の一秒までたゝかつて、闘つて切り拓いてゆきませう。（む）


◇誌代はすべて前納にして下さい

**前納誌代**

壹部 貳拾五錢（郵稅一錢）
半年分 壹圓四十錢
壹年分 貳圓八十錢

**送金法**

送金は振替が一番便利です。
誌代の受取證は別に出しません。
雜誌發送を以てこれに代へます。

昭和三年十二月廿日 納本
昭和四年一月一日 發行

東京市牛込區市ケ谷本村町四
發行編輯兼印刷者 村山文子

東京市神田區淡路町二ノ三
印刷所 協會社

東京市牛込區市ケ谷本村町四
發行所 職業婦人社
振替東京六四一六〇番

新年お目出度く謹んで御祝詞を申し上げます

三越では御儀式用の丸帯、訪問服等を初め其他新春の御裝ひに相應しい各種の品々を取揃へて居ります。本年もお買物は必ず三越とお定め下さいまして相變らず御引立の程偏に願上げます

# 謹んで新年の御祝詞を申上ます

——本年もお買物は何卒三越へ



# 三越

◆東京日本橋◆


大正十三年十一月二十二日 第三種郵便物認可
昭和三年十二月三十日 印刷納本
昭和四年一月一日發行（毎月一回一日發行）

婦人運動

第七卷 第一號

定價二十五錢